川柳雜誌

麻生路郎☆主宰

Pensoj flugas trans la land-limon

The Senryu Zasshi

No.327

八月號

昭和廿二年七月一日第三種郵便物認可
昭和廿九年八月一日發行第九卷第八號
（毎月一回一日發行）
創刊大正十三年通卷・三百廿七号

八月号目次

題　字……麻生　路郎
表　紙……米田三男之介
ビラを手にして……麻生　路郎（三）
放射能症に就いて……北川　春巣（一〇）
人間横丁（XVI）……東野　大八（一二）
諷刺吟はわれわれの手へ……品川　陣居（一三）
川柳を知らぬ人々……山本　葉光（一三）
斎藤　実　盛……富士野藜馬（九）
川柳夫婦善哉……諸　家（二四）
川柳第二教室……戸田　古方（二一）
★
不朽洞句帖……麻生　路郎（三）
近作柳欅……麻生路郎選　北川春巣選（一四）
川柳塔……麻生路郎選（四）
同舟近詠……諸　家（八）
一路集「古道具」「社宅」……大西八歩選（二六）　大森風来子選（二七）
各地柳壇……（二八）
大万川柳……（二三）
柳界展望……（二五）
不朽洞会から……（二四）
公私雑記……（二四）

八月第一土曜は…

川雑

本社句会

こゝが市内かと思うような静かな会場で夏の一夜川柳三昧に浸りましょう。初心の方も来会を歓迎します。

日　時　八月七日午後六時
会　場　光明寺　大阪市天王寺区下寺町二丁目市バス停前（市電なら下寺町又ハ日本橋三電停下車）
兼　題　「愛人」路郎選「愚痴」柴香選「イヤリング」三司選
柳　話　麻生路郎　**句　評**　戸田古方

川柳雑誌社句会部

八月第二土曜日は…

阿波踊見物と鳴門観潮吟行

阿波踊見物や鳴門観潮はかゝる機会がないと思られないので本社でお画していたところ帰日新聞でも同じ企画があると聞いていたのでそれへ合流することにしたが、こちらのプランも折込んで行くので申込は本社を通じされたい。

日　時　八月十四日午後一時・関西汽船の特発船で大阪天保山桟橋を出発（神戸から参加の方は中埠頭）小松島着　午後六時・特別バスで徳島市内へ（阿波踊見物（その夜は船内泊又は旅館泊）　八月十五日午前十一時まで自由行動・十一時三十分小松島発・船上から鳴門観潮・神戸着午後四時三十分大阪帰着午後六時

船内催物　川柳の話（麻生路郎先生）・地元有志の踊子本船に乗込み踊の指導・帰途船内で阿波踊と鳴門観潮の感想座談会

徳島では　阿波踊見物其他

会　費　大人　九五〇円・小人　六五〇円（往復三等船賃・朝・夕の三食付・小松島や徳島間往復バス賃・船内毛布代等）一等二等船室使用は会費以外に料金を要する

宿　泊　会員は船内で（無料）小松島や徳島の旅館宿泊を希望される方は前もつて申込まれたい。

申　込　八月十日までなるべく早く、

大阪市住吉区万代西五の二五
川柳雑誌社句會部世話人

入門も
奥義も
『川柳雑誌』
から

不朽洞句帖

麻生 路郎

どツからでも金は湧くよに云いふらし
粉ぐすりを残して家出してしまい
浴衣ぐらいは買つてやるさと云うばかり
職場結婚覚悟はよいかなど云われ
平和憲法などは忘れてパチンコ屋

ビラを手にして

京の街をジグザグに歩いていたら、メンストリートで一枚のビラを手渡された。

アゴの落ちる
大阪式ぜんざい
一度御試食下さいま
せ

と云うのである。

実際アゴが落ちたら、誰も喰べ手はないであろう。今の世の中の理窟ツぽさからゆくと、この文句をこのままにうけとつたら大阪のぜんざい屋から抗議が出ないとも限らないが、この場合の「アゴの落ちる」はホントに落ちるのではない。落ちるようなの仮定であり、ようなの省略である。しかもいかに甘いかを誇張法によつて効果的にしたのである。この場合、アゴの落ちるようなとしたら、落ちるとするよりも文句にマノビがして真実に近い文句にはなろうが、迫真力がない。そこでようなを省略して落ちるとしたのである。そこに、そんなことがあるものかと云う誇大以上のものを生じたわけであるが、この誇大は第三者に省略を直感させるので、少しも瑕瑾とはならない。川柳の作句に於ても、斯うした省略、斯うした誇張が一句の生死を支配する場合が多い。こんなことを考えているうちに京都駅へ来た。

—路 郎—

川柳塔

尾崎市　水谷鮎美

図らずも悪魔の住家みた乙女
悪魔フト花の匂いにむせかえり
やわ肌の養子に肩をもましてい

ホノル、市　内藤草一郎

人の娘をちと踏めるとは失礼な
見るだけのファッションショーへお伴する
性格は合わぬが子供だけは出来
怒る時だけに父親使われる
二度の縁もう仲人は頼まぬ気

米子市　三鴨三笑

犬ころも女中の足の太さ知る
蚊帳吊ればやつぱり日本間がほしく
隣りの娘どうやら咳をするらしい

布施市　吉田水車

もてるには勝てずあゝさよかあゝさよか
おばあさんを困らす孫の野球熱

弔里十九氏

一人逝き二人逝きする中に君

鳥取市　大西八歩

金策に行けば力を見くびられ
金持てばいゝ旦那だと冷かされ
無帽主義放射の雨にちとあわて

大阪市　須崎豆秋

酔ざめの水も呑めない放射能
てれくさくパツパパツパと喫うばかり

大阪市　正本水客

アルバイトサロンに居るを隠さない
口止の心算がねつこから通じてす
汚職には遠き椅子なり椅子が鳴る
電気洗濯器などはちつとも欲しがらず
掛時計旧家の音で一つ鳴り
靴磨きもさすがに声を掛けなんだ
夕刊を二三枚買う嬉しい日
一人きりにしといてとは女淋し
めずらしく女房が唄をうたつてた

池田市　黒川紫香

借金のたらい廻しで年をとり
水引いた様に法事の客が去に
死の灰とかゝわりもなくする抜毛
肩書もつかず停年とはなりぬ

大阪市　丸尾潮花

母と娘と猫を交えた夕餉する
ガツ〳〵と喰べて長男やせている
要求をしたボーナスで首がとび
ダイゼスト車窓の風をうけて読み
これきりになるとは知らぬ灯を歩き

大阪市　北川春巣

日未だ沒せずネオンのとぼけよう
酔うてした握手婦長の掌が固し
散髪屋大して禿げてないと言う
物覚えよい仲人でチト困り
ボート屋に子煩悩なを見てとられ
日にち薬庭の掃除が行き届き
二階から病人おきた咳をする
娘もう襖坐つて閉めるなり

奈良県　尾崎方正

南無阿彌陀痺れ燒香待つばかり
代読代読で式は続けられ
四月馬鹿惚れましたとは言い得まい
雑談組皆んな禿げてる禿げている
辞めると言い辞めさせぬと云う美しさ
自己に生き自己を守つて視野狭し

岡山県　浜田久米雄

朝の膳いま録音の父の声
盆栽をいじればたまつたかと聞かれ
へちま見る顔がへちまに似てたのし

大阪市　武部香林

小供の日

幼稚園みんな兜を着て戻り
更けたのに隣は胡瓜刻む音
つぶれましたと集金が戻つて来

大阪市　木下幽玉

だから飼うなと云うたぢやないか金魚死に
西日強しバイトサロンへ急ぐ娘ら

三尺ほど進んでなめくぢ見付けられ
くッしやみ一ッ残して八百屋の車去に
妻からも青春が消えてゆくさびしさ
根ッからの板場でなしかんしよやみ抜けず
おつちよこちよいの客からヂョウビリもうけとき
朝から来たのは乞食とメーターと洗濯屋
兒がないので夫婦げんかも長期化す
ひまだから向いの店のことくわし
歌舞伎座で妻の猫背をたしなめる

出雲市　尼　綠之助

会えば呑む友達甲斐の小鉢物
新聞に時の話題が多すぎる

大阪市　水谷竹荘

ネクタイを結ばしてねと甘えられ
女優今日舞妓のしぐさ教えられ
風船へ宣傳の文字如才なし

下関市　弘津柳慶

二階から見ればアベック横をむき
出張のついでにパチンコでも儲け

鳥取市　杉谷湖山

松風の音がきれいな海となり
どう工面するのかビルを建てゝ居る

宇部市　国弘半休

縁あつて職場結婚共稼ぎ
ヴェランダの金魚も同じく囁やけり

兵庫県　小西無鬼

旅愁とや酔い痴れてみても湯の宿の
老妻にくすぐつたくも甘えられ

尼崎市　小林文月

妻何を祈るか時間倍かかり
散歩中も頭はなれぬ高利貸
散歩して名士の宅の位置を知り
二号宅の勝手口より散歩に出

大阪市　渡辺孫拙

金魚飼う小さき命三日だけ

大阪市　富岡淡舟

心ならずも赤い羽根に横を向き
胃を悪くして帰りたる下戸の旅
串本で酔えば串本節になり

奈良県　飯降白香

義父に恋はる生徒の悩に激怒して
くだらない相手は無視することに決め
失綜中の夫と駅でハタと合い
ローケツのネクタイに見る彼の趣味

宇部市　長野井蛙

代筆と知らずサインを見せ歩き
狸寝の起きるそぶりも人を喰い
養子かと訊かれる程に恐妻家

京都府　間島青丹子

取り卷の顔も変らず飲み歩き
倖せだと言つてもそれを信じない

大阪市　森下愛論

ネクタイを撰る手のしわへ齢思う
パトロンが替るたんびに引越して
子の居ない時に帰つてもの足らず

岡山県　直原七面山

別れようか別れまいかで五年経ち
ウインクとウインクオフイスの窓と窓
恋一つ知らず女子大卒業し
ぶんなぐる愛情なんてありますの

大阪市　西森花村

モク拾い日の出拜んで出かけたり
一パイにネジが戻けたあの頭

鳥取市　河村日満

君付けて呼ぶ代表へ茶菓を出し
母親の看護は医者を驚かせ
焼香へ代表の服あせている
病狀へ藥替りの酒を飲み
月形も黄門を演る齢となり

宿毛市　姫田夕鐘

署長のさばけた裁きに眼をつむり
今すでにローマの街は消えんとす
大時計二人の別れへ躊躇せず

岡山県　福島鉄兒

母と娘とぐるで小遣いせしめる気
夏服へ朝の涼しさ言うて出る

大阪市　谷内一草

エブロンの下横着な足が見え
死の前に我が教養のあわれさよ
おとづれし門ひそやかに花が散り
大世帯やれ〳〵今日もみんな寝た

大世帶新聞記者へ勢揃い
大阪市　福本翩骨

死神がノツクもせずに来た眞晝
吉報の訪問ベルを強く押し
牛乳ビンたまつたままで二号留守
浜に上れば海女もおろかな母となり
大阪市　榎南夏六

大世帶父さん案外呑気なり
妻の死へバラ飽くまでも白かりき、
大阪市　西いわを

十年はたつていそうな服で来る
居眠りが出るのも一人旅のこと
十万やそこらで臭いめしの味
言うなれば酒の肴になり給え
岡山県　服部十九平

浮気した過去を老妻まだ語り
洋行の留守を夫人が若返り
良縁をあつさり電話で断られ
飲む方もナンバーワンで名があがり
往年のライバルの死へ悔み狀
尼崎市　長谷川三司

言つたとて詮なし女ごころかも
内弟子へ師匠のくどい金魚の死
ナイターへ来て夕刊は尻にしき
兵庫県　若林草右

七輪を朝の銀座が起してる
持つて来る土産はみんな喰つて去に
大阪市　足立春雄

孤独孤独蝶も一羽で飛んで来た
文鎭が教えてくれた初夏の風
夢も枯れやれホルモンのビタミンの
葉櫻を待つて見に来た共白髪
熊本県　有働芳仙

先生がおむつの下をくぐつて来
模範囚婆婆から矢張り舞い戻り
蚊の多い所でも恋のオアシスよ
大阪市　地倶山風楼

泣いて来た映画へ街の灯のまぶし
下関市　石川侃流洞

高級車皆んな汚職の顔に見え
簾から叱つてる父も素裸
米壽の賀死ぬ気でおつた日を笑い
広島県　山田季賛

温泉で遊んだ果を死にそこね
降職の動機が僕をもりかえし
焼芋で儲けキヤンデーで損をする
車窓から見える田植は樂しそう
花活ける余裕がほしい子沢山
大阪市　山本葉光

金あればと少年が言う恐しさ
地下足袋に義理人情が生きていた
もう眞似をするなと師匠がきつくなり
大阪市　東喜久堂

家族会議親父多数で押し切られ
銅像となつても風雨の中に立ち
独身の車掌涙も情も無し

倉敷市　木村千容

良識が進言すれば赤じやとよ
あとしまつするのに苦労する常務
新築をすればあいつもかといわれ
月給でとても〳〵の家を建て
倉敷市　田垣方大

言葉まだ一歩手前の仲らしい
石川県　那谷光郎

極道をしめ出して置いて寢もやらず
社長室見合と知らず茶を運び
世がかわり髷型古りて妻も老い
近所中探つて寄附の額を決め
石川県　野村味平

備足の電話はきついとこを突き
よれ〳〵の袷一つの寄宿部屋
大阪市　木村水堂

人妻の口調になつて電話口
幼稚園に行つてもらうに機嫌とり
金があるまでの縁とは気がつかず
二夕廻り違う夫婦で仲がよく
堺市　八木摩天郎

朝飯にふと母さんの居た時分
そらアそうだが金の世の中
高槻市　福田丁路

賛成でないが挙手する気の弱さ
田植する乙女を写し叱られる
勿体なくも四、五人だけの一等車
倉敷市　水谷谷水

袖の下せんでか職場変えられた
三号がはじめての子を生んでやり
美容体操屋根の物干きしませて
刑務所へ逢いにいくのに憚からず
不貞腐れ妓生に似た坐り様
獣医々院哀れな犬が見上げてた
ざあます族値切りかければ見栄もなし
合併町青田の中で黄昏れる
抜擢の地位が惜しくて離別せず
日の出の勢で妾宅も建て
あまのじやくだがストには賛成し

倉敷市　椙原一善

味も知れヘンクツも知れて小さい店
子沢山泣く子ワメク子ふざける子
妬き方はこんなていどと教えられ

岡山県　岡田夜潮

こめかみが動いただけで物言わず
長命へ箸の長短気付きけり
寝床からこげつく飯をどなられる
仮縫を着れば服屋にすなおなり
スクーターを慾しがる娘もてあまし
何がそう忙しいのかスクーター
新緑の滴る中をカメラマン

岡山県　坂井三葉

雨宿り和服やむまで待つつもり
一駅を乗るにも女ゆずり合い
女学生席を譲つて記事になり

岡山県　政田大介

疲れたワなどと女は甘える気
落ちぶれて木堂の書まで偽にされ

岡山県　岡村牛耕

美味そうに見舞が飯を食つて去に
ニュースニュース耳があるのが嫌になり
割勘で下戸は手ばかり叩かされ
盛大な御祝隣気に入らず
花の下もう踊ろうか踊ろうか
親の子で呑めぬものかと苛められ
下戸の奴大きな顔で飯にする
そこいらの下戸に構わずいゝ機嫌
一滴もいけぬ夫を小馬鹿にし
酔つぱらつて殴つて欲しい時もあり

茨木市　下山清潮

宿題へ母の程度が一寸のぞき
青い目の子とならんでるうちのぼん
左派もいや自由もだめな議会すみ

岡山県　本田惠二朗

負けて勝つ妻の手ぎわにしてやられ
拝借の傘突風をもてあまし
選び抜き貰つたくせに敷かれてる
薫風へ妻の洗濯リズミカル

大阪市　眞鍋一瓢

ほろ酔へ遮二無二走る終電車
ビュティフルスポットですとうまく逃げ
女さま〳〵男さま〳〵交叉点
押し切つた貧その中でする晝寢
良識を買われてと云う女秘書

女には飽いた手に持つ大ジョッキ
いゝなあと水の流れを見てるなり

爆発事故犠牲者を悼む

本当と思えぬまゝに二七日

大阪市　永田六龍子

土曜日から来いと友情あふれてる
サンドウイッチマン足で稼いだコップ酒
大ジョッキ緑風に顔撫でさせる
脂肪身が好きと子の箸持ち切れず
憧れて来た大阪で眉を描く

鳥取県　日置文郷

私服着て看護婦使いもしてくれる
サロンパス母の背に座す久し振り
草花の通にもなつた闘病記

大阪市　尾野おさむ

押賣の次に税吏がやつて来た
三行の記事で片付く死を選び
横着者又税務署をてこずらせ

大阪市　兒山紫郎

水平線じつとみている海女の恋

大阪市　飯島二桂

死ぬなんて恐くないわと迫られる
秘密として楽しんで居り悔いて居り

大阪市　岩島雄歩

スナップはみどりをバックに笑つてた
それぞれに役を持たせて大世帯

大阪府　小池しげを

ウンそうか　そうかと　養子の代になり

酒飲むなサツケのむなアと梯子やつてくる
思人も金で精算されている
兵庫県　竹内圭三

パン食にあいて外遊帰つて来
安もんの金魚がいつちよく動き
二階から隣へ行ける街に住み
倉敷市　松村万古

掃除までほんまに派手なバレーの娘
長生きはマイナスとなる日を送り
倉敷市　藤井春日

全快の身へ貯金帳憐れなり
茶話会と言うにビールの用意もし
いもうとが女將さんとなる世界
忘れものお届けしたにひつたくり
大阪市　木口賀峰

辞令一本雇われの身を意識する
熱心ですねとお隣りが云う謠曲
多数決女の愚痴をあとできき
へそくりで買えぬ眞珠と知つた志摩
名誉会長などゝ棚上げされて居り
岡山県　岡本緑風子

洗濯をするのよ雲よのいてくれ
映るものすべて鏡にして娘
名案があるのに末席言いそびれ
岡山市　津田麦太楼

女に言い負けて煙草に火が点かぬ
女の声に受話器を抱えこみ
社長のキヤメラに皆な出て並び
人形を作る余技あり立女形
米子市　小西雄々

ワイシヤツを脱ぎつゝ嘘を考える
いつからか妻の言葉が母に似る
警笛に車掌職務の顔となり
虚無僧に景気を聞いた占師
岡山県　浜野奇童

ずぶ濡れになつても野球まだやめず
清掃へ運動場の廣い事
放課後のやつぱり子にもボスが有り
家の娘がもうイヤリングを持つていた
吹田市　橋本幸男

カーテンの様なスカート飜し
堺市　高崎雄声

酒だけは秀才とてもやめられず
岡山県　三枝一策

お急ぎとお見受け申し茶もいれず
制服を着れば車掌の声が出る
元通り添うにきまつた照れくさき
老妻よお前は其処に居つたのか
砂浜を此処からおんぶしたらしい
大阪市　森文夫

母が居ぬ日はおとなしい子の食事
ありの儘書いて泣かせた故郷便り
自殺した記事あの人も収賄か
大阪市　吾郷玲人

エプロンの白さは停留所迄送り
主婦の会サンガー夫人を呼ぶはなし
子を連れて叱られて来た農繁期
岡山県　岡田青果

農魂は小便わが田までこらえ
人生の午后を小言を言いつづけ
大阪市　若本多久志

同僚に利子までくれとよう言わず
あわてて證據他人の名刺出し
見ない振りされたよ娘と散歩して
見送りに来てみりや二号あつたのか
マージヤンでない外泊はすぐ知られ

同舟近詠

松山市　前田伍健

虚子叱る極堂翁は金つんぼ
風神も雨伯も困る放射能
長野県　高峰柳兒

吊革を味方に精勤続くなり
呼びつけて待たして叱る廻り椅子

OSK
毛織物
既製服
製造卸商
株式会社
大坂商店
大阪市東区糸屋町一丁目二
電話東㊷一七四五番

齋藤實盛

冨士野　鞍馬

壽永二年（一一八三）五月、倶利加羅谷で大敗した平維盛の軍は、義仲の軍に追われながら逃げ、加賀の篠原で一寸抗戰した。その時、ただ一人踏み止つて戰死した齋藤実盛の話は有名である。

実盛は越中の豪族であつたが、源爲義、義朝に仕え、その後平宗盛に仕え、武藏の長井に住んで居た。それで長井の齋藤別当と呼ばれていた。

平維盛が、冨士川へ出陣の時も、また、北国行にも進んで從軍した。この北国行について、実盛は、宗盛に向い、

「かう申せば、実盛が身一つにては候はねども、先年坂東へまかり下り候ひし時、水鳥の羽音に驚き矢一つをだに射ずして、駿河の蒲原より逃げ上つて候ひしこと、老の後の恥辱、ただこの事に候。今度北国へまかり下り候はば定めて討死仕り候ふべし。実盛もと越前の国の者にて候ひしが、近年御領つけられて、武藏の国長井に居住仕り候ひき。事譽の候ふぞかし。故郷へは、錦を著て帰ると申す事の候へば、何か苦う候ふべき、錦の直垂を御免候へかし。」

といつて、宗盛から、大將の着用する錦の直垂をもらい、それを着て、頭髪の白いのを黒く染めて、七十三才の死花として出陣した。それを川柳は、興味をもつて作つている。

実盛は晴着を一つねだるなり　（タル十二）
行がけの駄賃実盛ねだり出し　（〃　三五）
実盛は死出の晴着をねだり出し　（〃　五七）
実盛は枯木に花の身ごしらひ　（〃一三八）
実盛は守袋を上着にし　（拾　五）

等と、錦の垂直を詠み、郎党に実盛墨をこくすらせ　（タル四九）
実盛は大さらひ程墨をすり　（〃　三七）
涙で墨を実盛の女房すり　（〃一五五）
白髪を黒く染めたのは赤へ義理　（〃一五九）
大詰に実盛若く作つてる　（〃　八八）
実盛はまんがなる気で若くなり　（拾　五）

と、髪を墨で染めたことを、おもしろく想像している。

江戸時代には、白髪染用に、黒油というのがあつた。そして「美玄香」というのが有名であつたので、

今ならば実盛も買う美玄香　（タル一六七）

という句が見え、

篠原香と名付けたい黒油　（タル一二四）
実盛はしやれる気でなし黒油　（〃一二九）
実盛と後家若武者に黒油　（〃一四二）
実盛を巴が見出す黒あぶら　（〃一五〇）
実盛が討死ほどに後家つくり　（〃　三五）

等の句もあり、その後、白髪を染めることを「齋藤実盛」と洒落るようになつた。

こうして、実盛は、篠原合戰で、逃げる平軍中、一人止つて、無抵抗に、木曾方の、手塚太郎光盛に、首を與えて、最後を遂げた。

年寄の化物手塚組みとめる　（タル四六）

義仲の前で首実檢となり、旧知の樋口次郎が見て、実盛とわかつたが、髪が黒いので不思議に思い、それを洗うと、墨がおちて、白髪が現れた。

実盛が首を洗ふと墨流し　（タル一五〇）
洗つたらとんだばく物手塚取り　（〃　二九）
洗つたら手塚浪島ほどたまげ　（〃　十五）

等と川柳になつている。

実盛は、義仲が幼い時、木曾の中原兼遠の下へ行く前、七日間救い養つた、恩人であるので、義仲はねんごろに葬つた。

直垂は打敷にもと木曾納め　（拾　五）

暑中御伺

川柳雜誌社
岡山支部

岡山市内田町三二五
大森風来子
浜田久米雄
鈴木九坡
服部十九平
延永忠美
政田大介
津田麦太楼
田垣方大
水谷谷水
椙原一善
本田恵二朗
岡村牛耕
田村藤波
大森娯句楽
永松東岸子
臼井呑風
臼井三林坊

散髪は
何はともあれ
男まえ
寺田町裏駅南
南柳

放射能症に就いて

北川春巣

私は昨年の末に、此の壇上から皆様にお話をしたのでありましたが、半年後の今晩、又も皆様のお耳を汚す光栄を持つことになりました。此の機会をお与え下さいました路郎先生に感謝致すものであります。

さて此の時間は毎月、鮎美さんなり、古方さんの句評がありまして、これは作句上大いに有益であり、私も実に楽しみにしておるのでありますが、皆様も御同感であろうと存じます。所で私は句評など出来る柄でもありませんので、何か私に出来る話で、皆様の御参考になることを申上げたい、とかように考えたのであります。

私に出来る話、と云いますと、矢張り病気に関する話ぐらいしかないのでありますが、病気の話は、その病気に罹っている人々は、成程熱心に聴いてくれますが、健康な人には何の興味も与えないものであります。人間と云うものは、自分が明日罹るかも知れない病気でありながら、今現在罹っていなければ、その話は喜んで聴こうとしない。丁度地獄・極楽の話でも、若い間は聴こうとしないで、年寄って死期が近付くと、説教を聴いたり、仏様を拝み出すのと、よく似ているのであります。

そこで話題を病気から転じまして、皆様が一様に興味を持って聴いて下さる話は何か、と考えて、「放射能症」を選んだのであります。放射能に関しましては、物理学的のこともあり、仲々難かしくて私にはよく分りませんが、「放射能症」と、病気の事になりますと、これも難かしいには違いありませんが、医学の本を読むことが多い職業柄、多少皆様よりはよく分っている、と思いますので、私に分っていることを少々お話して見よう、と思います。物理学的の事に関しましては、若し此の中に専門の方がおられますなら、御追加なり、御訂正なりを願えれば有難いと思います。

所で放射能に関する句でありますが、六月号の雑誌を探して見ますと、先ず巻頭に

此の雨に帰らしやんすか
放射能　路郎

と云う放射能雨の句が目につきます。放射能雨の恐ろしさを、「帰らしやんすか」と俗言で云わしめて、女の人の男を思う真実をよく出しておられます。「本当にうまいなア！」と思うだけで、私の到底真似ることの出来ない句であります。

放射能雨に関しましては、方々で測定せられて、何百カウントあったとか新聞には発表されておりますが、詳しい測定の条件も分りません。目下調査中とのことでありますが、少くとも現在の所では、これが体表に付きましても、人体に左程危険はないとの事であります。若し此の女の人が、それを知っていて此の言葉を云ったとしますれば、「真実」を吐露したところが、却て威赫射撃をしたことになると思うのであります。矢張り此の場合はそんなことは知らずに云った、とした方がよいと思います。

次に雑誌にはまだ出していないのでありますが、先日私が参りました浜寺病院の句会で、

原爆の雨結核に効いてくれ
AT公

と云う句がありました。浜寺病院は御承知の通り結核の病院でありまして、句主は勿論患者さんであります。「放射能を含んだ雨が、今、世の中を騒がしているが、これが結核に効いてくれないものか。」と云う患者のはかない希望を詠ったものとして、私にはよく分るような気が致します。現在はストマイだとかパスだとか、ハイドラジッドなどの結核の特効薬がありますために、余りやかましくは云われませんが、一昔程前には結核の「レントゲン療法」と云うのがありまして、悪い肺へレントゲンを照射しますと、よく治る、と云う種々の報告が医学雑誌、殊にレントゲン学の雑誌を賑わしていたことがありました。放射線にはアルファ線・ベーター線・ガンマー線と三種類がありますが、その中のガンマー線がレントゲン線とよく似ておりますので、此の空想的な患者の願いも、或は医学的に云って笑えぬものがあるのではないか、と思うのであります。レントゲン線を絶えず受けておりますレントゲン技師なども、慢性の放射能症に罹っておると云われております。

今回のビキニの灰を受けた漁師の人々の病気は、急性の放射能症と名付けられるべきものだ、と発表されましたが、その症状のくわしいことはまだ発表されておりません。然るに広島・長崎に於ける原子爆弾被爆者の症状は、既に本になって発表されておりますので私がこゝで喋りましても差支えないものと思います。今回の水素爆弾の威力は、原子爆弾の何百倍にも及ぶそうでありますので、その原子爆弾の症状を申上げれば、その想像も大体はおつきになるだろう、と思いますが、その原子爆弾の時の症状が又大へんなものであります。原子爆弾の症状を、放射能症に対しまして、「原子爆弾症」或は単に「原爆症」と云っておりますが、これにも急性と慢性とがあります。

原爆の爆発に際しましては、強い熱と爆風とが起りまして、烈しい熱傷を起し、或は爆風が建物を吹き飛ばしてその下敷になり、或は放射能による高度の急性原爆症のために爆心地から半径一粁以内で被爆した人々は、即死又は準即死の形で、全部死亡したと云われております。半径一粁から二粁の

地域で被爆した人々は中等度の傷害を受け、その居りました場所が戸外であつたか、屋内であつたか、屋内であつても木造家屋内かコンクリート建の中かなどにより多少の違いはありましたが、大多数の者は二週間から四週間の間に重い症状を起しまして、その死亡率は五〇%であつたそうであります。二粁から四粁の地域内で被爆した人々は、傷害も軽度で、放射能の傷害だけで死亡した者は、極めて少なかつたのであります。

然らばどんな症状であつたか、と云いますと、高度の放射能傷害を受けました場合（幸いに家の下敷にもならず、焼死も免かれましても、）被爆直後或は数日から十日位迄の間に、嘔吐と高熱、高度の脱力疲労感を訴えはじめ、ついで出血症状例えば吐血とか下血或は歯肉出血、粘液を混えた下痢等を現わし、三十八度から四十度の高熱が続いて、一週間から十日位の経過で死亡するのであります。

中等度の放射能傷害の場合に於きましては、被爆直後に嘔吐しまして、その後の数日は食慾がありません。然し時が経つにつれて、一旦は元気を回復し、或る者は救護作用を手伝つた位でありましたが三―六週間位の間に約その半数が発熱と共に頭髪が抜けて、つる〳〵坊主となり、出血、口内炎等の症状を起しまして、発症者のうち約半数に近い者が死亡しております。

これは私が直接、大学の或る教授から聞いた話でありますが、当時大阪で有名な芸者が広島に親戚がありましたので、被爆直後の広島へ急行して救護作業に従事しました。何日間広島に滞在していたのかは、聞き漏しましたが、大阪へ帰つて来てから体の調子が悪くなりまして、大学病院へ入院したそうです。その中に頭髪がすつかり脱けまして丸坊主になり、さしもの流行つ妓も二目と見られぬ顔になつてしまいました。これを聞いた病理学の先生が、それが芸者とは知らずに、そんな病人がいるのなら参考のために一度見ておきたい、と云うので内科教授の廻診の時に随行して行つた所が、その芸者から「先生！」と声をかけられたので、自分がその芸者と馴染であつたことが知れ渡つたと云うので、びつくりして逃げて帰つたそうでありますが、その芸者に見覚えはない、と云い張つておられたそうであります。それ程人相が変つておつたわけでありましよう。此の芸者も先程申したような経過を取つて死んだとのことでありますが、被爆直後の広島に残つていた放射能のためだろう、と云つておられました。

今回のビキニの灰の事件は、御承知の通り読売新聞が逸早く報道しまして、他の新聞を数時間も出し抜きましたので、その担当の記者は「殊勲甲」と云うわけであります。勿論初めは、此のニュースがこんなに世界のセンセーションを巻き起こす大事件に発展するとは思いもしなかつたそうでありまして、記者自身も何も分らぬものですから、焼津港に於きまして、あの第五福竜丸の中をとび廻つたそうでありますが、それが今では前の芸者さんのような症状で、東京の病院に呻吟しておるそうであります。然し治療法が発達して来ましたせいか、死んだと云うことはまだ聞かないのであります。

新聞の報道によく患者の白血球数のことが出ておりますが、広島・長崎の場合の経験では血液の変化が特異でありまして、赤血球数は血液一立方粍中に正常では四五〇万―五〇〇万あるべきものが、二〇〇―三〇〇万に減り、白血球数は正常の場合六千―七千のものが、高度傷害の場合には千以下、時には五百以下になり、中等度傷害の場合でも二千前後迄減少しておりました。軽度の放射能傷害の場合（爆心地から二―四粁の地域での被爆者）には、多くの場合特別の症状は示さなかつたのでありますが、その場合でも多くの人々に於て、血液の変化は認められ、白血球数は三千―四千位に減少しておりました。

次は原爆傷害の後障碍症（後遺症）に就いて一言申上げます。原爆の熱傷の後で、「みゝず腫れ」のような傷痕が残つて、所謂ケロイド問題として世の注目を引いたことは、皆様もよく御存知の所であります。これは熱傷に関することでありますので、私は今、問題を放射線だけに限りまして、主に造血臓器その他内臓の傷害に基いて起る後障碍状態を、簡単に述べようと思います。

放射能の作用で、造血臓器が或る程度以上障碍せられましたものは、白血球や赤血球が減少しますが、幸い一旦は回復しましても、その後何らかの誘因によりまして、逆にその機能が亢進し、白血球が無限に増殖して「白血病」が起る可能性のあることは、初めから各方面で注意されておりました。所が昭和二十年十一月に長崎地区での被爆生存者の中から、「急性白血病」の第一号が発生し、次で二十一年九月には、広島地区での被爆者の中からも「急性白血病」が出ましたので、此の問題が益々やかましく云われ出し、その後年が経つにつれ、広島・長崎両地区での被爆者の間から白血病の患者が出て、現在迄にその数が百余例に達しております。かの「長崎の鐘」を著して有名な永井博士も、慢性の白血病で亡くなつたと記憶しておりますが、これが被爆と関係のあつたものかどうかは、私まだ聞いておりません。一般に「被爆者白血病」と普通の白血病とは、臨床的に或は解剖的にどう違うか、と云う決め手はまだないのでありまして、発生する度合が被爆者の中に多い、と云う統計学的のことから、関連性を想像しているに過ぎないのであります。

白血病と同時に注意されております問題は、「貧血症」の問題であります。初期の貧血は大多数、一―二年の間に次第に回復したようでありますが、然し何年か経つた後にも、診察をして貧血症を見ることは少くないのであります。勿論貧血は色々の原因で起りますので、これが原爆との関連性を検討しますには、極めて慎重を要す

人間横丁 (XVI)

東野大八

花と飛行機

また八月の終戦記念日がやつてきた。早いものである。十年近いこの歳月が、何にもまして私には至極短いものに感じられるのは、激烈な衝撃が、胸奥を根抵からゆさぶつたゝめであろうか。思えばこの日私は、北京郊外の陸軍病院の一室に在つた。

午前十一時ごろだつたろうか、衛生兵が私たちの病棟にやつてきて、正午一装用軍服で、第一内科正面玄関ラジオスピーカーの下に集れ、というのである。ハテ何の日であろう今日は、とわれわれは別に改つた気構えもなく、いわれる通り筋の入つた軍袴をはいて、所定の場所に向つた。米軍〝大敗のビッグニュースか〟〝トルーマンが捕虜だつてサ〟など、新ニュースにうといわれわれは、今思えば、くそたわけなほど、のんき千万だつた。それだけに、おかしみ一ぱいの涙の悲劇は、胆にめいじて凄じいものになつてかえつてきた。雑音だらけのそのスピーカーの放送者は、なんと天皇陛下御自身、しかもその玉音とやらは、日本の無条件降伏！日本にとつて終世忘れ得ぬこの歴史的一瞬！すべての日本人は果してなんとその胸に、この声をうけとめきざみつけたことであろうか。

〝なんということだ、全くなんとしたことだ〟

私も呆然自失、うつけのようにたゞそうくりかえすばかりだつた。音たてゝ足下からくずれ去つていく絶望の虚しさ……。そのとき私は、ふいにたまげるような人間の叫びを聴いた。それは私の傍らの男だつた。大口あいて彼は、止度なくゲラゲラと笑つているのだ。しかし私はその笑い顔を、無感動にたゞ眺めているだけだつた。笑え笑え、死ぬまで笑え、そんな気持でもあつたようだ。だが予期に反してその笑う声は、不意にピタリと嘘のように止つた。その顔はやがてしかんだ。とみるまにその顔からせきを切つたような涙だつた。頬から顎に滴りおちて止め度ないその、白い滴に私はやつと冷たい現実を意識した。そして今更のように、身の廻りの人間を眺め渡した。松葉杖をついている。手押車に乗つている。空つぽの袖をフラリと下げている。戦盲もいた。眉も鼻もない化物のような貌もあつた。醜塊なそれは、戦争による不具のおびたゞしい集団…その人間たちは一人も動かない。傍らに朱い血のようなカンナの花が、その人間どもを嘲笑するように、酷熱の陽をはじいてかつと火のように咲き猛つていた。八月十五日のこの日の太陽を、私は、私の肉体が滅びるまで忘れないであろう、その紅いカンナの花とともに…。

絶望と虚無と頽廃と自棄の生活が、この日からこの病院にある二千三百名の患者たちの中にはじまつた。逃亡、窃盗、自殺、殺傷。この喧燥と焦慮、それは流血と死の道世を意味したといえるだろう。その最も極端なのが、不具の肉体を戦争の永久的記念物として背負いこんだ、戦傷患者に甚しかつた。

〝戦勝の日露戦争の折にさえ、われわれのような兵隊を傷兵と呼んだ。敗戦した今日、われわれはなんといつて片づけられるのか〟

私は、私の仲間にそういつて自るのでありますが、中には「再生不能性貧血症」と云つて、極めて悪性のものもあるのであります。

生殖器傷害の後遺症としましては、先ず不姙の問題が検討せられました。女子に初期に認められた月経の異常は、半年乃至一ヶ年位で大部分が回復しまして、姙娠、分娩、産褥等に何らの異常を認めないようであります。男子の場合、中心地域での被爆者に初期には或る程度の無精子症或は減精子状態が認められ、後遺症として不姙が残るのではないかと、心配されておりますが、此の点は未だ明らかになつておりません。レントゲン線でも、長期間これにさらされておりますと、不姙症が起ると云うことが云われております。これは分裂の盛んな若い細胞程、一般に放射線に対して敏感であるためでありますが、それに関して、被爆の子供の発育状態が調べられております。即ち爆心地から一粁以内で被爆した幼児は、他の者と比べて、色々の点で発育の障碍が認められ、又母親のお腹の中にいて被爆したものは、胎児期・新生児期・乳児期共に死亡率が高いそうであります。

生殖細胞が、放射能によつて一定の変化を受けますと、その子孫に奇形が生れる可能性があると云うことが、動物学的並に植物学的実験の結果云われておりますが、原爆に被爆した人類にもこれが当てはまるかどうか、の問題は、今日の段階ではまだ解決していないそうであります。それからもう一つ面白いのは、被爆の母親から生れる子供は男児が稍多いとのことであります。

原爆症は大体以上で終ります。

が、これは、

「原子爆弾災害調査研究特別委員会医学科会長」の都築博士の論文によつたものであります。

次は近作柳樽の中に（十七頁）

酔うてゝも鮪の刺身だけ

喰わず　紅月

と云う句があります。これは所謂「原爆まぐろ」のことであることは云わずと知れております。鮪以外にも近頃は色々の近海魚に、放射能が見出されておるようでありますが、魚に付いておる放射能は、どの位まで食べても大丈夫かと云うことを、医学の立場から考えて見ようと思います。然しこれが又簡単でないのでありまして、第一に灰そのものが多くの原素を含んでいるようでありまして、原素によつて、体内へ吸収される率が違います。体内での沈着部位も骨・腎臓・肝臓・甲状腺等と色々あります。

話を簡単にするために、最も危険であると云われております「ストロンチウム九〇」だけと仮定してお話をして見ますと、「ストロンチウム九〇」は、普通にある化合物の形では、胃や腸から約六〇

嘲と卑屈の口をゆがめた。私は、私と私の仲間をこうして醜虜と呼んだ。（降伏は、オール日本人を捕虜と呼んだ）

それはとにかく私はやがて現地除隊した。いうなれば泥沼の環境からの遁走である。

さて、北京城内行のトラックに乗つて出発をまつ私に、三人の可愛い看護婦が乗りこんできた。彼女らは北京女学校の生徒で、報国看護婦として徴用されてきた少女たちだつた。日赤や陸看の看護婦たちに酷使されたこの群の少女たちの働きは、誰よりも私ら患者が一番よく知つていた。この少女といえば…。私はいつた。

〃ハヤブサが飛んだころは、しかしよかつたネ〃

あゝ、ハヤブサ、そう口の中でくりかえした三人は、案の定眼を輝やかして吐息した。

二月ほど前、この病院から一人の飛行服の兵長が、多くの看護婦に送られて退院した。ハヤブサの飛行士で、なかなかの美少年であつた。随つて女学生看護婦の人気は絶大で、入院中、彼の枕頭にはいつも人形、菓子の山が築かれ、二、三人の少女の姿が絶えなかつた。われわれ老頭児兵は、大いにそねんだものであつた。退院に当つて彼は、見送りの彼女たちにこう約束した。あす十時、この病院の上を、私は飛行機で感謝の意を表します、二回旋回して三度翼をふりましよう。彼女たちにとつては、大変なプレゼント、大感激したこと勿論である。

その日九時半、激をとばしたとみえ、病院中の報国看護婦全員約三百名が、病院中央のグランドに整列。北京郊外南苑飛行場から発つ、そのハヤブサをまつた。やがて定刻、紺碧の空のどこかゝら爆音がきこえた。さつと看護婦の隊列が動いた。とみるまに轟々たる爆音が、病院中の木々をゆるがして頭上に迫つた。待望のハヤブサだ。地上から一せいに万歳が起り、つゞいて華やかな拍手がわきたつた。みるとその隊列は「カテ」という人文字をなしていたのだつた。それに応えるように二度の旋回を終つたハヤブサは、力ある翼を二、三度ふつてみせ、やがて銀翼キラリと青空に一せんしたとみる間に、真直ぐ大空の深さに消えていつた。

〃よかつたワ〃 〃すばらしいワネ〃 〃涙が出た〃 〃勝つ、きつと勝つわね〃彼女たちは、そうこもごも叫びあつて手をとり肩をくみ、眼頭をふいていた。爆音去つたこのグランドの、ざわめきを、三階の病室から終始眺めていた私たちも、思わず胸がつまつた。飛行機の感激より、それは眼の下の純真神のごとき少女たちのまごころに感動したというべきだつたろう。

〃ハヤブサはよかつた〃

空を仰いで私のこの独白に、彼女たちは彼女たちの追憶があるのだろう、そうねえと、一瞬眼を輝かしたが寂しくあとはうなだれた。それは大空深く消えていつた、あの少年飛行士の姿を、胸に追つて哀しむ風にも私にはみえた。

川柳雑誌社特製
投句用 柳箋
一冊（五十枚綴）三〇円
送料 八円

武田薬品
熟眠できますか？
不眠症・神経性不眠症・神経衰弱・ヒステリーの方に
カルモチン錠
30錠（80円）・100錠（200円）

%が体内に吸収されまして、骨に沈着するものは約四〇%であります。そして此の骨に沈着したものが、血液に変化を起こさせるのであります。物理的半減期が約二十年、生物学的半減期が約十年、有効半減期が約七年半で、一度骨に沈着しますと、仲々体外に出て行きません。体内沈着も「最大許容量」は一マイクロキュリーであります。食べました量の四〇%が骨に沈着しますので、二・五マイクロキュリー以上食べると危険と云うことになります。二・五マイクロキュリーを一〇粍の距離で測定して、何カウントになるかと云うことは、色々の条件で一概には申せませんが、大ざつぱに云つて、五千カウント前後ではないかと思われます。現在の危険度測定の基準が一〇粍で百カウントとなつておりまして、百カウント以上あれば魚は廃棄することになつておりますから、安全率は大体これで充分であると考えられます。

放射能雨が身体にかゝつた位では、危険のないことは先程申上げましたが、雨水を飲みます場合は、又話が違うのであります。その中に含まれる最大許容量があるのでありまして、これが又原素によつて異りますが、大ざつぱに云つて一万分の一以上のマイクロキュリー数が一リットル中にあれば、一応危険と考えられます。従つて飲料水を雨水に頼つている地方に於きましては、その中の放射能を測定して、その値が最大許容量以下であることを確める必要があるのであります。又雨の降り初めの部分に、放射能が比較的多く含まれておりますことは、調査委員会から発表された所であります。

放射能症に関しましては、本を読んでおりますと、まだ申上げたい事柄が沢山あるのでありますが、今月号の雑誌には適当な句もございませんし、今晩は時間もございませんので、一応此の位で止めさせて頂きます。

御清聴有難うございました。

（六月二十日本社句会に於ける講話、筆者は医学博士）

大阪名菓
かま吉かわらせ
浪花の最中
百貨店著名菓子店にあります
大阪市阿倍野区晴明通二ノ一九
民 かまど本舗
電話 ㊥三四〇九

近作柳樽

麻生路郎選
北川春巣選

祝酒どつと笑えばもうまわり　岡山市　宗高八ツ茶　同
美容院に居る間にお婆さんが死に　同　同
名人位パチリパチリと争われ　同　同
女房の手紙最後に用を書き　同　同
見栄坊のその細君がみなしやべり　同　同
パットとは知らぬ視線へ胸を張り　同　同
玉手を打つて煽風機向けてやり　同　同
三人も居つて家業を皆嫌い　岡山縣　小坂田雨水　同
猫の爪もて遊んでるよい話　同　同
夏季手当あてのやりくりとは淋し　同　同
幸福は姫鏡台でする化粧　同　同
その銚子借せと上座へ又取られ　同　同
雨の降る話の内に焔がつき　秋田市　梶川　蘇堂
天気警報だからと云うて策がなし　同　同
鋸の音母親をあわてさせ　同　同
手数料別に謝礼の要る仕組　同　同
百合の蕾へ曲尺を当てて見る　同　同
金もうけがまず孝行と割り切つて　大阪市　藤村　梨花
滔々とのべた理想を置いて嫁き　同　同
悪魔主義そんな言葉で儲けてい　同　同
しかたなく女嫌いで通して来　同　同
思索などやめろくとどなるジャズ　同　同
バックミラーも意地悪い生れつき　和歌山市　秋月　宏方
二号邸還暦過ぎたとは見えず　同　同
戦争で出来た財産ともいえず　同　同
儲るの活字小さくても目立ち　同　同
小猫まで俺をなめてる倦怠期　岡山縣　香山　樂天
補聴器をかけた婆ちゃん恐く見え　同　同
新薬の記事に喜ぶ不倖せ　同　同
故郷へ錦どころか病み呆け　同　同
入院の留守に家賃を値上げされ　貝塚市　津田　千舟
院内のたかが散歩に着る結城　同　同
ダービーの大穴馬主買うていず　同　同
新聞の折込ふえるボーナス期　同　同
わが家ほど楽しものなしもの虫は揺れる　愛媛縣　鳥井　川鳥
どの廣告も金もて来いの作り替え　同　同
街の散歩とは正札を見て歩き　同　同
金のない日にひつそりと本を読み　同　福田　卓風
ネクタイを結ばせながら髪を嗅ぎ　石川縣　同　同
笑顔などせぬ福祉事務所員　同　同
勧誘と知らず座布団茶まで出し　同　同
耐乏にラジオの料理安くなし　米子市　勝田　正郎
大見得を切つて汚職を撮される　同　同
一桁を違えて読んだカメラの値　同　同
徹夜までした答案の白いこと　尼崎市　武田　朗糸
長男はジュースでよいと頼りない　同　同
只酒へ恩師の顔が出ては消え　同　同
スト妥結社長カメラへ苦笑い　貝塚市　小島さぎす

暑中御伺

前田伍健
松山市真砂町二一

高峰柳兒
長野県須坂局区内太子町

須崎豆秋
大阪市阿倍野区旭町三丁目一四

戸倉普天
兵庫県氷上郡沼貫村字小野

杉谷湖山
鳥取市職人町

秋月宏方
和歌山市今福北部一二八

西いわを
大阪市東住吉区桑津町七ノ二二

長野井蛙
宇部市港町一丁目宇部鉄道職員会館

岡田夜潮
岡山県英田郡美作町大字北山

山本葉光
阿倍野局区内王子町二ノ三二（電(66)四〇〇八）

東京都四ツ谷局区内新宿区若葉町一丁目十五番地
富士野鞍馬

橋本緑雨
大阪市東住吉区平野西之町八三

気忙しい夫を尺が追いかける　同
これしきの雨に長靴レインコート　同　藤川　幻詩
不平なく犬荷車を曳かされる　廣島市
好物のソバまでファンは知りつゝ　同
駅の数だけが自慢の新市制　同　三好　澄泉
里の母たまにはやけと教えに来　大阪市
飲めぬのを不肖の子だと嘆く父　同
水爆は反対ですと雨宿り　同　米沢　曉明
答弁は慎重目下準備中　愛媛縣
猪の被害調査も新市制　同
来て見れば絵葉書程の景でなし　同　福長　凡八
仔犬にもしつけを見せていゝくもし　大牟田市
病人へ痩せたと言わぬことにする　同
女史などゝ知性豊かに賣れ残り　同　坂野はん平
標本になつて不粋な蝶々の名　京都市
京みやげの舞妓はみんなむこゝ向き　同
豊風呂に子供の線でいる舞妓　同
看板の小さいえくぼがよく稼ぎ　兵庫縣　吉原　紅月
白百合を活けて邪念を遠ざける　同
愛情が背中の蠅を追うてくれ　同
政治家の代りに小石けとばされ　松阪市　萬濃　修
強情を通して寢たが腹がへり　同
功成り名とげて小菅の味も知り　同
てれくさい使へ幼兒抱いて出る　京都市　坂野壽利庵
豪華船の三等室で酔うて居り　同
欲しい物みんなガラスの向う側　同
会長は寄附の負担に耐える人　今治市　長野　文庫
最後までまさかと思う親の馬鹿　同

子に飼われ錦魚壽命を縮められ　同
駅が出来工場が出来街が出来　惠那市　伊藤とみお
お見舞に聞かされて居る金づまり　同
きれすぎる噂職場がまた変り　同
傘を拡げながら放射能を考える　大阪市　石井　高志
溜息をつきに見に行くファッションショー　同
運試しにやつて見ようぜパチンコ屋　同
親子程違い世間がはゞかられ　大阪府　石川ひさみ
社長もう光にかえている出社　同
ヌードモデルになつかぜ女事務同志　同
火の如し氏も素性もあるものか　大阪市　山川　阿茶
武者人形二郎の分も一つ殖え　同
良妻になれそうもなし赤い爪　同　梶尾　節子
こんなのが流行つてるかと世帯じまい　岡山縣
薫風へ野つぼの臭も乗つて来る　同
就職難かと新聞を見るいゝくらし　同　早川　野甫
新聞の怒りを怒りとする奴さ　大阪市
ごみ箱をバタ屋不服な音でしめ　同
表情があつたと見えぬ頭骸骨　同　千郷練習生
血色を互にほめて梅雨も過ぎ　和歌山縣
深刻も居る腰かけも居る職安所　同
話題をばギッシリ詰めて妻見舞　同　石本案山子
セコハンで我慢させてる二女三女　和歌山縣
里親の気性鯉にも見栄をはり　同
総領の甚六プロの四番打者　同　村上　旭堂
煮え過ぎた野菜料理も母の味　愛媛縣
日本中ほとんど雨であきらめる　同
きつかけがあれば話題はたんと持ち　同

富岡淡舟　大阪市阿倍野区天王寺町北三丁目五五ノ一
福田丁路　高槻市郡家新町六五一
吾郷玲人　大阪市住吉区南加賀屋町四二一
木村十悟　大阪市阿倍野区旭町二ノ一二〇
佐賀市水ケ江町郵便局裏　南川光男
川雑大原支部　諷柳会　岡山県英田郡大原町
虹川柳倶楽部　新岡回天子　佐賀県唐津市魚屋町
川柳雑誌社　阿倍野支部
川雑大聖寺支部　石川県江沼郡大聖寺町字法ヶ坊一四
川雑八代支部　八代市大手町八代地方事務所前
岩田十三楼　福岡市箱崎茶屋小路　電東四四一五
不二田一三夫　生野中學校二年生　茂子　勝山小學校六年生　潤子
大阪市生野区勝山通六ノ七

ラッシュ時の電車社会の部品詰め　大阪市　増本　翠露
給與係の憂鬱手取り少くて　同
指先にピクリと樂し沖に釣る　同
朝刊を拡げたまんま御出勤　滋賀縣　土守トン坊
写眞機を購つたで帰省したくなり　同
金屏の前に祭のザル碁連れ　同
日曜の夫の室は掃き残し　出水市　川端　柳風
父ちやんは坊やが巧く起して来　同
パチンコ屋遊ぶつもりが儲けて来　同
踏まれに行く靴丹念に光らせる　大和高田市　戸田　悅子
孝行な子が病人にしてしまい　同
添いとげる家がなかなか見つかぢず　同
ピースがバットへ火を借りに来る　大阪市　不二田三夫
耐乏の日本に犬が多過ぎる　同
定期だけ戻つて来たのもスリの義理　同
老骨に鞭打つつもり新会長　大阪府　深見雅樂太
内職の小さな稼ぎ妻めげず　同
肩先へ眠つたらしい首が乘り　同
雨の降る日は殊更に田植らし　福岡市　岩田十三楼
湯の街は雨クーポンのバス並ぶ　同
求人の齢が目につく更年期　同
駐在も来ていた村のパチンコ屋　出雲市　佐藤　泰之
家中がカメラに非常呼集され　同
赤ん坊のあくび生意気そうに見え　同
三面へもつと美談が欲しい国　大牟田市　吉村奈良夫
雲見てるときも川柳かと聞かれ　同
譲られたコケシ譲つて退院日　同
僕の子だやつぱり鼻が上を向き　兵庫縣　酒井ひか平
あの細い腔してまめに儲けて居　同
お迎えを待つて年寄慾もあり　同
人妻になる日が近い美しさ　岡山縣　永松東岸子
雨もりへとがつた声で妻を呼び　同
金もないくせに経済欄を読み　同
婦人会布令るにいち〳〵腰をかけ　岡山縣　中田　野川
焼いて見せたりして服地つかまされ　同
なおそうと思うた樋へ二年経ち　同

加茂一家

ラケットの輸出のように子を送り　岡山縣　佐々部　瀟佐志
田植する足裏どじようにくすぐられ　同
退職金娘一人が嫁つただけ　同
お神樂に巫女の口紅見逃さず　姫路市　難波　愁夢
汚職記事妻左派張りの口をきゝ　同
蜜豆を食うサンダルは足を組み　同
半分は金持貫録で押し通し　岡山縣　小林　夢介
耳打ちをしてから変る酒の味　同
賣る時に始めて偽物だとわかり　同
夕食へ僕の作つたトマトが出　高知市　有友　純男
釣つて来た魚一疋孫が喰べ　同
台風に予算くわれた委員会　同
子を托す先生ストへ白だすき　岡山縣　国正兼比羅
麦がねて百姓アジヤパー言うとれず　同
結納も子牛相場で婿を取り　同
浮浪兒が派手に食べてるチョコレート　佐賀市　南川　光男
かけ茶碗こんな優良兒を育て　同
無利息で借りたお金は後にされ　同
日々癒ゆるあすの生活に怖えつゝ　岐阜市　石神　古木

暑中御伺

藤本滿年
藤本茶々
東京都目黒区平町二五

石居高志
大阪市天王寺区上本町九丁目十八番地
永樂輸業株大阪出張所
電㊐二五九七番

沢田四郎作
大阪市西成区玉出本通一ノ一三
小兒科・沢田医院

川柳雜誌社　備前支部
岡山縣和気郡吉永町

武部香林
武部若菜
大阪市東淀川区三津屋北通四ノ二九

献立は眼で喰い耳ですゝるもの　同
尿ビンを捧げビールになつて見ろ　同
仲人を頼まれそうな年になり　大阪市　西川　惠風
口だけは一度温泉に行きましよう　同
エプロンを着ても娘はキユツト締め　同
○女医さんの名医と言われまだ一人　新潟縣　高野　不二
汚職には縁なき職で整理され　同
運ちやんの話を入れる観光車　同
株々々ビルの谷間でよろめけり　大阪市　石田　沐天
アルサロに勤めなまめく事務に　同
隠芸社長は奇声挙げただけ　出雲市　久家代仕男
その寄附は強制ですかに座が白け　同
癒える日は何日ぞ金魚に水を　和歌山縣　那須虎兒朗
政治への不満も書いた療養記　同
ターミナル目で笑われたモク拾い　大阪市　伊藤　光二
長談議とは知らず拍手でむかえ　同
軽手術鮒の料理をふと思い　岡山縣　大塚美能留
顔隠すパラソルだつた薄曇り　同
少々の風邪押して出る給料日　京都府　家根　光夫
恋人があり小遣に事を欠き　同
「一寸待て」の自殺の場所の観光地　石川縣　石川素百々
乳房が見えて行水の垣根越し　同
薫風の床の「あやめ」を撫でてぬけ　岡山縣　南部ひでを
ライバルの濡れて行くのもおもしろし　同
目に青葉これで金さえあつたなら　大阪市　高田　一夫
パリモードかなしや足は日本製　同
もつたいなやまぐろミヽズの餌になり　大阪市　土居　利一
一票へ下げた頭をなぐり合い　同

「一寸待て」見せものにする　離去地

洗濯器買えずなぜたりさすつたり　貝塚市　護川　梢月
遺言など書いた病後とは見えず　同
農繁へくまその様な髭が伸び　岡山縣　池田　古心
又無理も言える田植を手傳いぬ　同
からかいも野次もうれしいランデブー　京都府　清水三哲英
政治論僕ならと云う意見もち　同
言い分のある賛成をしてかえり　廣島市　御戸　凡平
賛成の数へ無理八理引き出され　同
失業保険俺一人なら食うてゆけ　岡山縣　長尾　越鳥
酒乱などあるとは見えぬ恐妻家　同
恢復期安静時間を持てあまし　貝塚市　平山久摩夫
ホテルへは女の方が馴れており　同
十代の赤に新緑いろどられ　貝塚市　河楊　梵鐘
しかるべく雑魚は雑魚として汚職　同
ぱた〳〵と動き軽うに見られてい　大阪市　神谷凡九郎
ぽんと胸たゝいて呉れてそれつきり　同
恋愛論さも体験を語るよう　京都府　今井三樂子
人前もあつて恋人ほつとかれ　同
夏期手当ネオンの街が美しい　岡山市　小野花團子
大掃除戦斗帽が役に立ち　同
後任の弁も浅学非才なり　岡山縣　片山　巷雨
麦刈つた後へ雛出してやり　同
神経痛昔の無理がたゝつてい　吹田市　菊田いさむ
別室に先手が来てるとは知らず　同
問われても知らぬ名もある花造　貝塚市　安永芙美子
恋人の結核菌なら恐れない　同
妻の言う事ならわかるつんぼなり　大阪市　本多　省三
初対面の時の着物で憶い出し　同

川・雑・梅田支部

岩田一夜　長谷川三司　中塚夢生　真鍋悦朗　飾間杏花　水谷鮎美

川柳雑誌社篠山支部

兵庫県篠山町　多紀郡小川町

小西無鬼　田代尋四　酒井ひか平　小畠無聖

大阪逓信病院
鳥ケ辻川柳会

尾崎　方正　市場没食子
若林　草右　足立　春雄
西川　惠風　中谷ハナ子
小沢　史葉　吉田　斜水
井上　露芳　橋本　峰春
西口比呂志　橋本　幸男
津村　神峰　水谷　竹荘
木村　喜男　池戸　桃村
西辻　竹青　客員
森下　愛論　北川　春巣

民主々義数の力の恐しさ　山口縣　安平次弘道
保安新党首から下は出来上り　同　大町　別城
一年に二度穫る米で麦を喰い　岡山縣　同　羽子田　雞太郎
留守をする方の子供へ高うつき
カウントが何のヘチマと子は泳ぎ　松江市　同　加川　成人
洗濯機目あてクイズに精を出し
猛犬に注意可愛いゝ声がもれ　山口縣　同　谷　一平
停年を控え課長の世辞の良さ
放射能猫も魚にありつけず　大阪市　同　松下京一楼
検診へ湯タンポの様な胸を出し
年不惑妻もやりくり堂に入り　京都市　同　徳持晩稲子
張り合いのないこと默つて喰う夫
週末のプランを流す雨となり　鳥取市　同　岩川　寛虚
眞知子卷だけは似ていた夜の女
團扇風の見え透く世辞を受けて呑み　愛知縣　同　横田　放人
明日逢えるのに別れともない二人
改善へ窓窓窓の台所　愛媛縣　同　星野　侑正
さびしさをスクーターにて走らせる
見舞客へ仰山に手術の話をし　島根縣　同　森山　荘
ボーナス日下戸の夫がいじらしい
心に黑雲がわき雨が降る別れ　出雲市　同　中村九呂平
友来りうれしい事を云つて去り
豆腐屋のラッパ公舎に親しまれ　下關市　同　金子一軒屋
分別もあろうに青酸加里で逝き
ガイガー計数管　同　森本黑天子
民族の悲劇不気味になりひゞく　和歌山市　同　野田素身郎
戰後派の田植はジャズを口ずさみ
下肥をかついだ肩で風を切り　河内長野市　同　久保田青竹
男臭いとどぎつう云うて去にもせず　同　絹下　南天
手を握るまでは慎重期した恋　倉敷市　同　堀口　欣一
ハネムーンから帰えれば二階住いなり
療養の知識がついて熱下り　和歌山縣　同　竹原　雲平
世話する気娘の顔をほめて去に
聞く人が聞き琴の音が冴えて来る　奈良市　同　石原　文郎
別れ道弁当を貰う共稼ぎ
京の雨今朝も八ッ橋焼いている　京都市　同　小浜　牧人
大臣表彰默々としてペタルふみ
ため息があくびとなつて帳簿閉ぢ　出雲市　同　菱田　満秋
騒音に住み別荘の夢を持ち
スタイルをほめてもほしい海水着　岡山縣　同　坂本竹ん馬
マネキンの着ている浴衣買えて来る
独酌で樂しんでいる隅の椅子　西宮市　同　富永　邦坊
のみこんで呉れた安堵がつぎこぼし
気休めと知りつゝ易者の前に立ち　天理市　同　新岡回天子
てれかくしに出した舌が写つとる
こゝからは坂だと氷屋旗を出し　出雲市　同　安原　斜木
抱擁におなかの虫が鳴いている
病む雞をのぞいて見ては水を変え　同　野口卯之助
ダイヤルは総理の声で歌にする
新妻の六感にくる写眞帳　唐津市　同　川西　去水
市営住宅隣と趣味の違う庭
バンガロー母は水着になつただけ　岡山縣
退職へいきゝか冷たい事務机
鰻屋のうの字うなぎに似てるなり　宮崎市
吉日を選ぶ暦に丸をつけ
御趣旨だけ御傳えするとうまく逃げ　赤穂市

暑中御伺

大阪形水
大阪市東区系屋町一

菊沢小松園
大阪市阿倍野区玉子町三丁目三四番地

木口賀峰
大阪市東淀川区西中島町五八一

三鴨美笑
小西雄々
米子市

川雜赤坂支部
赤坂川柳社
岡山縣赤磐郡赤坂町

川雜堺支部
八木摩天郎
堺市九間町山ノ口

百薬の長だと遂に病で死に　同　松下　蘇水
働いて晩酌の味めしの味　高知市
沈む日へ今日の反省して拜み　同　田淵　紫笑
入学をこつそり祝う程の恋　岡山　同　岡崎　泰三
逢曳へプレゼントのネクタイしめて行き
嬉しい日つゞき髭そる日が続き　御坊市
拭掃除心も拭いているつもり　同　櫻井　幸男
十円の切手に唇づけ祕めた恋　大阪市
いゝ匂い残し隣の見舞去に　同

天理教本部参拜して

天理市をハッピの街にしてしまい　大阪市　木村　十悟
出開帳なんてきれいな儲けよう　同　岡本　鳥石
親切な言葉へ泣くも中風性　山口縣
温泉地無理な足場へ家を建て　同　中松　一恒
恋愛が四角四面の式を挙げ　石川縣
十二貫とも思われぬ言を吐き　同　川口　秋香
席でもめ会費でもめて酒でごて　大阪市
名物の土産を持つて出開帳　同　小田　柳叟
抵抗はやんわり痛いとこを突き　貝塚市
廻診日青春を追う化粧する　同　岡野風の子
田舎道馬車がタクシー引きづつて　倉敷市
見晴しのきかぬ所を好く二人　同　飯田　柳庵
社用族出張兼ねてハネムーン　愛知縣

名古屋にテレビ塔現る

柳までマロニエに見えるテレビ塔　同　原　章坊
忘れ得ぬ証拠手紙がよう燒けず　出雲市
散歩から拾い上げたる嫁候補　尼崎市　岸本　丹馬
退院を待つ恋人に痩せが見え　京都府　一男
夜泣蕎麦鼻も交互にすゝり込み　和歌山縣　木下　義廣
新市ともなればネオンもつき始め　倉吉市　横山　宣昭
お見舞は化粧の匂い置いて去に　和歌山縣　田中無津美
賣上げは小錢の多い不景気さ　大阪市　宮川　斧鉄
声を聞くはずの政治が押しつける　出雲市　平井　芳風
肩車孫は菓子屋へ梶をとる　下關市　宗貞　白馬
家計簿は給料日だけ思い出し　金吉市　奥谷　弘朗
資本家の言葉が胸に突刺さり　京都市　楠　輝雄
フレンチへ上着を掛けてやるナイター　神戸市　岩田　一夜
熱心に聞かれ冗談とも云えず　鳥取市　橋本　皐月
夫婦両輪離婚話はおかしおす　今治市　越智　義夫
不渡りへまだ純眞のある御辞儀　山口縣　加川　大然
恩給をとつて余生を筆で生き　大阪市　坂田　眞一
恋人の話とぎれるヘリコプター　京都府　甲斐　嘉澄
自惚れた東京弁がなまつてい　室崎市　針重　白雨
まゝごとに眞直に帰るネは苦笑させ　鳥取市　岩田天保錢
婦人科へ希望の妻はためらわず　大阪市　清水　望峰
一盛の原價を言うて品でまけ　大阪市　正口　辰始
自惚れの高い姉だけ賣れ残り　兵庫縣　林　澄子
散歩ですと云うがその実子守なり　兵庫縣　船川　雅行
化粧せぬ手が萎びてるサンドン屋　神戸市　三好　兵六
二、三日里へ帰つて田植灼け　石川縣　桑山　とよ
動物園とは平和な多数決　大阪市　安井　蜂呂
引越してへちま日よけに植を見る　廣島縣　山田スミ子
病上りお花畠が眼に泌みる　西宮市　田伏　水里
女心がほめてもくれぬまゆをひき　西ノ宮市　成子坂の　東浜　成詩

交通局川柳会
北川春巣
大阪市北区東扇町二一
大阪市交通局病院内科

若本多久志
寓居　大阪市上福島南三ノ七
自宅　金沢市七宝町十五

帝化川柳会
佐野白水
谷一平
松下京一楼
深見雅楽太
清水一朗
外一同

川雑出雲支部
出雲市高松　尼　綠之助
同　今市町　原　独仙
島根縣平田町　多久和朱扇
同　久家代仕男
出雲市今市町　竹原雲平
同　森山壮
同　野村岬月

川雑下関支部
石川侃流洞　中村九呂平
藤井米三　藤田嶽人
高橋かうたる　岡藤四郎
坂田良坊　向田婁楊子
弘津柳慶　久芳木陽子

水爆の祝にワンマン出掛ける気　京都府　西浜　獏仙
希望だけ並べて楽し子沢山　大阪市　金井　文秋
洋服を貸せば靴まで借りられる　出雲市　石橋万古人
花便り一本提げて来いと云う　和歌山縣　今井那智黒
パンの砂はらつてもたす兄らしき　金澤市　平尾　豊子
大気焔合槌打つて奢らす気　和歌山縣　那須　栄久
子の寝言喧嘩の続きがあるらしい　大阪府　岡島　孤舟
手加減もなくおつしよきん芸に生き　大阪市　永田都詩子
見合からはや呉服屋がかぎつける　石川縣　藏谷　曉人
二等車の美人はスパスパ喫つていな　倉敷市　矢吹日出雄
未帰還の父にすまない炬燵へ寢　岡山縣　田測　笑鬼
禁煙したのに中元皆煙草　大阪市　岡本　昭童
海水着ねだつて妻のまだ若し　鈴木縣　淵川　秀敏
雨期が来て去年の被害思い出し　塚市　辻　圭水
結婚後撮つてくれない妻の愚痴　京都府　小林　小正
末席にまだ残つてるトンコ節　群馬縣　荻原　竹郎
素うどんのうまさがわかるように喰べ　滋賀縣　久保　和友
初孫のしわまでおれに似て笑い　兵庫縣　出口白猫兒
捨てようと思てた仔猫みな育て　京都府　柿本　古竹
五万分歩けば海に突きあたり　岡山縣　岡　一門
早乙女の流れ〳〵て田植する　和歌山縣　深田やよい
小豆島見える視力を羨まれ　岡山縣　松島　不在
梅干に弱日本の味で病み　岡山縣　藤原　民德
葉櫻になるまで宣傳ビラを吊り　大阪市　右本　一子
自惚が昆にかゝつたかけ將棋　岡山縣　浜口志賀夫
大世帶お前任せは勝手すぎ　大阪市　橋本みどり
靜脈を青く浮かせてぐつと呑む　岡山縣　及川　南洋
人間の弱さ肋骨にある恐怖　大阪市　清水　和夫
ジャ〳〵馬のような恋人持て余し　京都府　中島　英一
お人好明日は明日とおごりおり　西宮市　山本九里三
買いたがる妻のミシンへ説くデフレ　岡山縣　大石　一久
かりそめにほめれば又も自惚れて　七尾市　清水　山花
團扇でも使つて居よと待たせる気　岡山縣　富池　茂人
反対をしても後妻と云う強さ　倉敷市　佐藤千代春
サラリーのぎりぎりまで着て歩き　岡山縣　松下　泣虫
理解ある筈です課長も苦学生　和歌山縣　西岡　春風
牛の子に嫁入仕度して貰い　岡山縣　山田ゆき江

「君の名は」完結

眞知子の生死で事務室もめており　大阪市　原田つとむ
過去なればダイヤもさした指なし　岡山縣　藤田　美雪
失業へ市場の使申しつけ　大阪市　嵯峨香雄瑠
トラックのどうしようもない牛の足　岡山縣　野田ポン太郎
夏場所のテレビへ人道まで塞ぎ　大阪市　中谷ハナ子
恋人と通れぬ道が多すぎる　京都府　福永　凡秀
ビールなら飲むよと末子恐しく　大阪市　池戸　桃村
誰からの電話か電話にお辞儀をし　奈良縣　木村　喜勇
汚職族その貫錄を見下げられ　岡山縣　西山　晴々
憶測を尻目に走る救急車　京都府　佐藤　圭
歳のこと看護婦さんへ触れずおき　岡山縣　東　靜人
恋人の派手なが親の気に入らず　京都府　妹尾　孤舟
パチンコの裏と表に通う恋　西宮市　植村　白馬
ミス一人夢見て候補百出し　尼崎市　眞野　逸風
親馬鹿は子の大学を口ぐせに　出雲市　美好　雪生

暑中御伺

南海電気鉄道株式会社

同一部柳川

川雑倉敷支部

木村千容
田垣方大
水谷谷水
椙原一善
松村万古
藤井春日
安原斜木
矢吹日出雄
野田素身郎
佐藤千代春
長尾越鳥

川雑貴生川支部会員

山田季贊
山田スミ子
廣島縣安佐郡可部局區内亀山村
中大毛字公家住宅第四号

川柳第二教室

戸田古方

五、最初の投句

川柳雑誌四月号の「公私雑記」に第二教室の紹介記事が載つてから数日後、四月三日の消印で松阪市の万濃修氏の投句が来ました。お目にかゝつたことはありませんが、句の上では毎号近作柳樽に投句されている柳人です。自分では「川柳に入つて二年の初心者」といつてられますが、二年といえば油ののり切つたところです。投句によるお話のはじめとして万濃氏へお返事をかくつもりで書いてみることにします

〃責任の文字政治家の辞書になし〃

○〃知らしめず教えず愚民などといゝ〃

○〃活潑な議論は会議果てた後〃

○〃しかたなくあやまる顔を叱られる〃

〃お天気は保証するよと誘い出し〃

○印は私がつけたものです。五句とも感じの句というのではありません。穿ちの部類に属するもので川柳らしい川柳です。感じの句というのは詩情が匂いますがそれだけ面白味や諷刺は薄くなります。さて

〃責任の文字政治家の辞書になし〃

これは時事吟ですね。批判性の濃いものです。汚職ばやりのこのごろ、昔だつてこの句通りか知れませんが、一層今日の実感です。「不可能」という文字は朕の辞書にはないといつた皇帝ナポレオンの言葉が思い出されて、その言葉から下五がみちびき出されたように思います。こういう引用は川柳にはよく行われるものでありましてう、うまく行くと仲々味なものですが、「文句とり」になる危険があります。さして内容もないのに奇をねらつて形だけとゝのえようとするのです。憶えている佳句に次のようなのがあります。

〃君などは悪貨のひとり流行るべし〃　一徹

〃白粉の下は光陰矢の如し〃　史城

「責任の文字…」の句はやゝ平板です。これは表現から来る欠点でしょう。

〃知らしめず教えず愚民などといゝ〃

という次の句からも「よらしむべし、知らしむべからず」という江戸時代の施政方針を思いうかべましたが、「知らしめず教えず」の上の九音字を頭に出し、しかも五音、四音の切れ目にいずれも「ず」の音を重ねてありますがリズム的です。と同時に力強さがうかゞえます。そして下に軽く「愚民などという」と他人事のように流してありますのが、意味の上でまた強弱のリズムを感じます。それだけ「愚民などといい」にふくまれたいきどおりが強くおし出されてくるようです。

〃活潑な議論は会議果てた後〃

この句と次の句の穿ちが強いようです。穿ちの句には面白い句が多く人を笑わせます。句意は「あとで気がつく天かん病み」というあれです。「雁も鳩もたつてしまつて」から気がつくのです。誰もがよくやることですが、自分がやるとあほらしく、ひとがやるとおもしろがつて笑います。この句も上五、中七に堂々と、何が出てくるのかと思わせる表現が試みられ、それがドンデン返しみたいに「果てた後」で静かにうけとめています。漢詩にいう起承転結の転がよく利き、それが意味上のリズムになつています。それに「すんだ後」とせず、「果てた後」のことばの選び方がよろしい。仮名で「はて」とするかわりに漢字の「果て」といつたのも大変結構です。

〃しかたなくあやまる顔を叱られる〃

先ず最初に「しかたなく」が飛びこみます。「しかたなく」なら本心はあやまつておらないのかもしれませんから、「叱られる」のもあたりまえでしよう。以身伝心ですからね。でもとにかくあやまつているんですから、その叱りはあまり手きびしくないことを祈ります。「しかたなく」は一応説明の如く見え、何かもつと具体的なことばはないものかと思われましたが、「しかたなく」とずばりとやつてのけるところにこの句のよさがあるように思えるのです。無駄なことばというのは

〃お天気は保証するよと誘い出し〃

の下五の「誘い出し」は説明のための説明のようで駄足です。「お天気は保証するよ」は会話そのまゝをもつて来ているのです。いつそのこと下五も会話に出来ないものですか。

〃お天気は保証するよ雨男やけど〃と直してみました。一寸動きかゝつて来たようです。この句のねらいが誘いという行動だけで、このまゝでは動きがあまりなさすぎます。もう少し動かしてみましようか。

〃雨男とみたか仲々ついてこず〃

〃大きな声出してお天気保証され〃

〃お天気を保証しられていゝそびれ〃

〃お天気の保証不思議にもあたり〃

どうもうまく行きません。

〃格子戸の外で天気の駄目をおし〃

〃格子戸を閉めて天気の駄目をおし〃

句主の句がどつかへいつてしまいましたね。この位にしておきましよう。

課題の外にこのような雑吟をもお送り下さい。

小児科
内科
平尾醫院
大阪市南区日本橋筋二ノ七〇
電話 戎一六四三番

諷刺吟はわれわれの手へ

品川陣居

六月三日の議会乱闘で、いわゆる徳川時代からいわれている〝落首〟が、どつと各新聞社に投稿されたらしい。落首という、ほんとうのいみは狂歌とか狂句に類したものを、人目につく場所に、人知れず貼り出された〝庶民の声〟であるが、当今では〝うそくらぶ〟とか〝かたえくぼ〟とかいう小さな囲みもので新聞雑誌に発表されるものをも含んでいるようだが、それはとにかくとして『マツリゴト乱るれば落首はびこる』というくらいで、かの田沼秕政を諷した——

役人の子はにぎ〳〵
をよく覚え

の一句が、人口に膾炙しているように、今日新聞や雑誌の川柳欄に、これら時事吟が相当数発表されている。素人作家のものは、いま手もとに材料はないが、玄人の石曾根民郎氏の最近作を少し拝借してみると、

ふりそゝぐ雨も嫌はず汚職の火
疑獄から浮名を流す焼きぼつくり
ふみにじる民意の底を海鳴り山鳴り
法に鞭返り有象無象を叱咤する
民情に敢へて背いてパイプ拭く

これらなどまつたく、グサツと一太刀斬り込んだもので、流石くろうとの作だが、われわれ川柳作家が今日この御時勢に「一句ひねつて下さい」と需められるものは、多くはこうした部面だけである。これでいゝのか——というナゲキは、ぼくだけのものではないと信ずる。

だが川柳家である以上、こうした句も作れるという弱点がわれわれにある以上、またやむをえないことかもしれぬ。〝賣れる川柳〟とは、たいていの場合時事諷刺吟であるからだ。

何故、世間が、こうしたものを要求するのか、それについて心理学者木田文夫博士のコトバが新聞にのつていたから借用してみる。「適当な言論発表のすべを持たぬ庶民が『落首』に気持のハケ口を求めるのは当然だ。落首大いに結構。ユーモアをとばすことから、ものを感情的につきつめて考えず、ゆとりのある合理的なものの考え方が生れてくる。だいたい今度の事件（六月三日の国会乱闘）は、何事にも感情的な日本の国民性が、はしなくも暴露されたものといえる。選挙民が感情的に選んだ感情的な議員が、感情的な政府と衝突したわけだ。この際、私達は、ほてつた頭を冷す必要がある。じようだんにも議会否認などのヤケを口走るべきではない。この際感情に走ることは、せつかく育ちかけた民主政治を崩れさせてしまうことになる。ユーモアを足場に、冷静な、庶民のチエが生れてゆくことを期待したい。」

——ユーモアを足場に、冷静な庶民の智慧が要求されてのことだという木田博士のコトバは聽くべきだとおもうが、われわれ川柳人は何故じしんの持駒〝川柳〟で時代諷刺に参加しなければならないのだろう。

第一われわれが作る川柳作品のそのごく少数に〝時事諷刺吟〟というものがあるのはやむをえないが、それがわれわれ川柳人の質的なものとして評價されるのは少からず迷惑なのである。量的なものゝ一部としての諷刺吟——なかには「川柳しなの」主幹の石曾根民郎氏の作品のごとき、すぐれたものもあるにはあるが、読者——大衆からは、そのものズバリ式な低級な作品が、より多く受け容れられて作品のもつニユウアンスは見のがされがちなのである。いわば新聞を、雑誌をよんでいる間だけの、ほんの一瞬の〝感じ〟だけのものとしてしか存在價値がみとめられず、「ハハアやつてるナ」ぐらいの消耗品でしかないのが不満なのである。いわば川柳の存在價値はあまりにも軽いのである。

これは、一つには素人作家のものが、新聞や雑誌の素人編集者によつて、投稿のハガキの中からチエックされて発表されることにもよるのであるが、川柳人としての不満は、素人作家のものと混淆され、川柳といえば素人臭いものという先入感をぬけきれないところにわれわれ川柳人は

山銀の瓶
大阪市大淀区長柄
福島一丁目四四
山銀硝子株式会社
電話福島四四四七番

不満があるのである。

〝落首〟けつこう——というならば、もつと玄人の作品を特に需めて発表すべきであつて、埋め草的に、読者大衆からの作品を発表すべきではない——といえば、〝庶民のうた声〟たる本質を喪失するというかもしれぬが、われわれ川柳人としては、素人臭い作品の横行は、神経的に宥しがたいのである。群衆素人作家のものより、年期を入れた玄人川柳作家のものゝ方にすぐれた作品のあることは自明の理であらう。少くとも時代の反映として後世に遺る作品は、玄人作家のものにこそあれ、「コレはチョットやつとる」式の作品からは時代諷刺の鋭さは求めうべくもないとおもうがどうであろう。ジャーナリストはもつと川柳界の内部事情に通じてくれなくては困るのである。

俳句の場合でも、俳句としては素人であるところの紅葉、露伴、漱石、鏡花、秋声等の俳句が、必ずしもすぐれた作品とはいえないように、どこまでも玄人、素人の差異はあるのである。

庶民というからには、われわれ川柳作家も庶民でなければならない。その代表庶民によつて作品化された諷刺なら、はゞかり乍ら後世に遺し得るものが作れるだろう——というのが、その限りに於いてのぼくの諷刺川柳肯定論なのである。少し論旨がやゝこしかつたので呑み込んで頂けないかとはおもうが、専門川柳人である向きには、恐らく左袒して頂けるとおもう。

要言すれば、時代諷刺吟は、専門川柳人の手へ——と、あえてジャーナリスト諸君へ提言する。お需めならば、いつでも提供する。たゞし小さく囲んだ埋草的取扱はごめん蒙るのである。

胃潰瘍
多過酸胃・胃潰瘍
十二指腸潰瘍
予防・治療
ファイナリン
酸中和剤少く、因療法
胃液を促進させる種
潰瘍を低下させ、同
度を作用がいちばん
副作格も低廉な新原
価剤です。予防にもよい。
山之内

川柳を知らぬ人々

山本葉光

藤本満年氏の『脱皮』で阿部真之助氏の『川柳論』に就いての間違を指しておられる。他の柳誌でも問題になつているが、二十年程昔にも直木三十五氏がやはり小さい問題を柳界に投げた事もある。だが、大なり小なり、文壇人は川柳を甘く見ている事は情けない事だ。手近な漫画人でも、瓜種平氏、宮尾しげを氏ぐらいが川柳を作句もし、又深い理解もあるが、ユーモアー作家でもサトウ、ハチローを始めとして作句も選者もやりながら深く知ろうとはしない人々の名は、トンチ教室的に多い。大衆文芸作家では野村胡堂氏などはかなりの理解を持つておられる。吉川英治氏などは雉子郎の柳号もあるので、理解は深いはずだがあまり川柳を語ろうとしないのは、東京に路郎先生のような大川柳家が、活躍をしないのかと思う。この意味で坂井久良岐翁が亡くなつたのは惜しいと思う。

暑中御伺

大阪市東淀川区三津屋北通四ノ二九
川柳雑誌社淀川支部
若本多久志　岡島柳詩
木村水堂　岡部発中
西森花村　中野庚申
鈴木天貧　小林文平
坂田眞一　三原朝風
志水礼三　武部若菜
早川野甫　武部香林
松下清

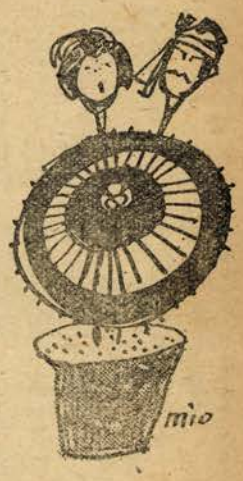
川雑西成支部
土井文蝶
大阪市西成区松通九ノ二二

川柳雑誌社ハワイ支部
ウイロー社
同人一同

大阪市東淀川区国次町四七九
金泉万樂

大阪市南区西賑町三〇
西尾栞

川柳 夫婦善哉



川柳みようと勇躍、オ、あついとおツしゃる方もごゞんしようが、あつさをもつて、あつさを消すのも俳句道の一つではないかといささか無い智恵を絞つたわけ。
1さちらが先輩か　2ベタハーフの作品に就て　3あなたのお好きな喰べ物。
（編集局）

○ 麻生 路郎

①私が先輩
②なか〳〵上手です。「のんで欲しやめても欲しい酒を酌ぎ」や「福寿草松にしたがい候かしこ」と云うように句によつて良妻ぶりを見せて居ります。スローモーションですが、おそらく死ぬまで作るでしょう。
③うなぎ、牛肉、豚肉、柳川鍋玉子、とうふ、さし身

麻生 葭乃

①勿論路郎が大先輩である事は、すでに、皆様も御承知の通りです。
②路郎の句には鋭い諷刺的なものと、詩的内容を多分に持つたものとの二つに大別する事が出来ます。総括して批判いたしますと「桜かざして今日も暮しつ」と云つた風な大宮人風の境地は見られません。ロシヤ文学を愛好する路郎の句は色で云えば寒い色です。大体淋しい句が多く、詩的内容を持つ句には、特に其傾向が顕著です。
③アルコール分を含むだ飲料水。酒は日本盛、白雪、沢の鶴、ビールはアサヒ、つき出しは蟹、貝類、其他うにあえ、おやつには羊羹、甘納豆、長崎カステラと云う両刀遣いの剛の者です。

○ 武部 香林

①若菜が川柳を始めたのが十八才の頃と云うのだから、残念ながら僕の方が後輩たるを免れぬ。
②彼女には雑吟が少ない。これは矢張り家庭人として、生活を充実させようとするうち、内蔵する作句意欲が燻ぼつたまゝで終つてしまうのであろう。従つて個性が摑み難い。近年は旅行も外出もしないので、視野が狭くなつたと、こぼすのを聞くこともある。
③私は何んでも食べる。豚みたいだとよく笑われたものである。幼少の頃から、松露、キクラゲ、蕗の台、雲丹、このわた、鯛の目玉等々、まるで酒飲みのようだ。近年は香魚や野菜でも、香りの高いものを特に珍重するようになつた。

武部 若菜

①意識して主人を誘つたわけではありません。結婚後ちよい〳〵故郷の山陽柳壇へ投句したり、求められるまゝに句を送つたり、自然家庭で私が川柳を語るものですから主人も作るようになりました。
②「この頃香林一寸うまくなつた」とお上手にも云つて下さる声を、私はお芽出度く受入れては居りません。叙情的な句よりも社会の実相を捉えたもの、軟かい美的感覚が不足して知らない間に香林独得の個性がデッサンの様に出来てしまつていました。私の遠慮の無い句評に「フン、香林張りやな」と笑い乍ら受ける事もあり、「未だ推敲中じやないか、電車の中や道を歩き乍ら作つたんやぞ」と傾斜して仕舞うと気の毒になります。とまれ暴風雨の中にも燈台の様に川柳を慣つめ、愛児の代りに川柳をこよなく愛して来た事は、その作品価値の如何に拘わらず、私は何か打たれざるを得ないのです。
③物心付いた頃から蟹が好きでした。食慾の減退した時、手造りのお寿司なりといただけば、回復する程あのさつぱりとしたお酢の味わいが蟹の場合と共通するのでしよう。果物は大好物ですが、西瓜、水蜜桃、最上柿、は何と云つても郷里の物で、大和西瓜や、富有柿では物足りません。

○ 藤本 満年

①川柳をたしなむ程度ならば僕の方が二十年も先輩ですが、真面目に川柳と取組むようになつたのは同級生です。夫唱婦随か、婦唱夫随かは天機漏らすべからず
②女の世界を詠ませると、茶々は全く驚くような境地を拓いています。社会観も多くは女でなければ感じないアイデアをもつています。それだけに、視野の狭さは否定出来ません。そして彼女は推敲をしない。浮び出たまゝを句にする。よく破調の句を創るのもそのためです。一言にしていえば素朴な表現なのですが、案外味合いがあるのです。姓格でしようね
③魚でいえば春秋の瀬戸内のサワラ、冬の海豚、夏はススキの洗い。野菜は何んでも好き、主食系では赤飯、うどん、鯛も好きな方だから、おめでたく出来ている。

藤本 茶々

①年は八つ違いですが、川柳学校は同窓生です。どちらが優等生かは神のみぞ知るところです。
②スパッと名刀で切つたような句が多くて人に有無を言わせないようなところがありますね。でも天真爛漫な句は彼の姓格丸出しというところでしよう。
③別に嫌やなものはありませんが、にぎりずし、鯛茶漬は特に好きです。

○ 吉形 朗

①苑女が大先輩です。
②矢張り女らしい細い点に気附きやさしさがありますが、男と女との着眼点の相違があります。
③特別大好物と云うものはありません。煮豆が好きですが、魚は大嫌いです。

吉形 苑女

①作句しはじめたのは私が先ですから私が先輩ですか？
②まだまだこれからなので作句の批判は出来ませんが、最初の投句で川雑に三句も抜けたのには驚きました。苑女先生のお蔭だと冗談を云います。
③お魚が好きです。主人は煮付の魚を全然食べません。喧嘩をしたらお魚と煮豆で背中をむいて御飯を食べます。

○ 三條東洋樹

①夫唱婦和ながら、その間余りにも年数の開きがあります。
②作れぬ〳〵と云いながら句帳を覗くと数多く作つて居るが、まだ暗中模索時代で、真の作家としての生命はこれからだと思つて居

る。

③鰻、玉子

三條　愛子

②主人の句はいつ作るのかちつともわかりませんが、毎月缺かさず作品を発表して居るのには感心します。句から受ける感じは安心立命の境地でなく悩みの多い多情仏心だと思います。

③鮎のぬた。

○　丸尾　潮花

①川柳を始めましたのは昭和五、六年ごろですから私が先輩でしよう。

②結婚当時の作品にくらべて、句が世帯じみて居ると申しますのか、生活そのものが変つて来たのでしようか、たとえば「二階からマッチ一本借りに降り」「かさばつて行くは貴方の交際費」「財布もう二十五日が近うなり」の様に実にふところ寂しい句を作つているようです。吉田さんのデフレに同調しているとも思いませんが、主婦としてのこの句を望んでいます。

③私の好きなもの、それは、何でしよう？　連座にぜんざいと答えるでしよう。

竹田花代子

①私が川柳を始めたのは潮花のもとへ嫁きましてからですから無論潮花が先輩です。初めて、投句致しましたのは、昭和二十三年の六月号の様に思います。

②潮花の句につきましてどうお答えしてよろしいか、私自身が、不熱心ですので、思う様に答える事が出来ませんが、今迄恋愛の句が多いようでしたが、最近年のせいでしようか恋愛でない句がでて居りますので新しい感覚を持つて味わつて居ります。私の好きな句は「蟹の泡子とゐる砂のあたゝかさ」「人の世と言ふを荒れたる掌に感じ」

○　榎田　竹林

①川柳に手を染めたのは、ほとんど同じ頃ですので、どちらが先輩かはつきり軍配を挙げられません。この方は亭主関白の位なんて威張るわけにはまいりません。

②「十年を夫婦の好み歩み寄り」というわけで、なか〳〵仲のいゝ夫婦でありますが近頃のデフレには御多分に洩れず苦しめられています。「石持てば苦労ばかりでない浮世」「小唄一とふし友禅のわれ髣髴と」と、碁石と三味線とは彼女にとつて、この世の中を愉しいものにさせてくれる道具の一つであります。「几帳面づぼら、銀婚式となり」てな具合に、私がづぼらで、自分は一つばし几帳面であると頭からきめているのなぞいゝ気なもんですが、づぼらと言われても一言も返す言葉の無い私である事は柳界衆知の事実であることは困つたものです。

③文明堂、栄太楼、風月から金鍔、大福に至るまで凡そ甘い物なら誰にもひけを取りますまい。然し酒もよし、ビールよし、ウイスキーも悪くなしという所謂乞食上戸の部類です。

榎田柳葉女

①私が柳誌「しづはた」（十冊ほどで廃刊）を出した大正七年竹林も句を出してましたから、どちらが先輩かわかりませんが主幹としては私が絶対先輩。

②竹林の句は自然を取り入れるのが多いので、その俳句じみたのがあまり私の好まない所、句会の題詠などに感心する句が多いです。「ダンサーの消炭に似た恋をする」「程たつて寒い不貞寝の掛け布団」

③さしみ、すのもの、いかやきといつたさつぱりしたもので、五勺ほどと、夏はビールコツプ一パイといつた所です。

○　服部十九平

①同期生と言うべきかも知れないが、夫唱婦随で始めたのだから、十九平の方が先輩になるでしよう。

②近頃なまけてとんと作句しない、そして批評だけはよくする、曰く、十九平の句は古い、常識的だとか十九平のスランプも長いとか、減らず口を叩く、私は斯うした作句をなまけるしげ女の批評なんか頭から軽蔑している。そして敢て宣言する「句で挑んで来い」と。従つて近作のみるべきものがないが、旧作の「招かざる客に飲まれた祭酒」は庶民詩としての相当なものだと買つてやつている。

③鯛茶漬

服部しげ女

①勿論「十九平さん」の方が先輩、あの初めも今も変らぬ川柳への愛情と熱情に引きずられて作句を始めたのですが、今では大きな、ズレが出来てしまいました。このごろは、もつぱら鑑賞の方でお附合い願つています。

②「銀婚の妻トーストパンに似て」ひが目で見ればどの様にも取れるのですが、なるべく善意に考える事にしています。主人の作品は余りにも常識的なものが多く古いなどと云うといやがるのですが、ここで今までのマンネリズムから飛躍したいゝ句を示してもらいたいと蔭ながら、念じています。

③にぎり寿し

○　木下　幽玉

①小生

②五、七、五に並べるのがやつとこさ。それでも句会で路郎師選に抜けた時には大騒ぎでした

③甘いもの、胡瓜の浅漬、うなぎ

木下　敬子

①主人の方が先輩です。

②破調の句が多い。時に感心する程好い句を作る。家での出来事をすぐ川柳に作つたり、私の悪口を句に作るのでうつかり出来ない。

③御鮨特に（あわびのにぎり鮨）自家特製の焼そば

○　永田六龍子

①私が先輩です昭和十二年に始めて入門し、それ以来精進？しては居りますものゝ、多趣味な故か、頭の問題か、此れと云う名句も出来ません。若し名句＝笑つちやいやよ＝が出来たら庭に句碑を建て度いと念願して居ます。

②経験の問題か大体に於て句が幼稚です。しかし女ならではの句もあり、先輩の私が、たゞたゞする時もあります。柳歴が古い丈けの私には何等の記録する句もありませんが、都詩子は阪神パークの句で第一席に入選放送をキツカケに、昭和二十七年度市民川柳で市長賞、不朽洞賞、去る六月新日本放送で佳作放送等、御主人様しつかりせんと、あきませんで……。

③すし、季節物の冷やつこ、特に漬け物等、とに角あつさりしたもの。食べ物は姓質を現すとか、人間至極淡白。

永田都静子

①主人の方が先輩です戦時中大分空白はありましたが主人は十七年程前から、私は三年前からです最も雑誌は主人の戦つてるのを時々読んではいましたが——。

②主人の川柳は此頃少し柔らかく上手になりましたが性格通り固

すぎます。漢字が沢山入りすぎます。作品にむらがあつて気が向いたら好い句も作りますが向かなかつたら一寸も作れないらしいです。それで席題は短時間に作句する関係から苦手らしいです。

③油つ濃い物、例えばスキ焼、洋食など魚肉類を使つたお料理、甘い物は嫌い、かき餅など辛い物が好きです、其くせ、奈良漬、からし、生姜、など嫌いです。

○　黒田　笑泉

①川柳を始めて五年位だと思います私の方が多少先輩と云う所で川柳に関する限り久米女には文句は云わせない事にして居りました

②「嫁が来て急に気が合う老夫婦」古い川柳雑誌からやつと見つけだしたのが、この句或知人の実際を表現したものだそうですが、田舎では時たまこんな「嫁いびめ」な老夫婦もある事を耳に致します……口八丁手八丁の久米女ではありますが、川柳は今一歩と云う所、私の古い句に　税務署へ口八丁の妻をやり」この方は実に上手にやつて呉れます。

③甘いものは何んでも好き、一例挙げれば、ぼた餅、ぜんざい、しる粉、南瓜

黒田久米女

①笑泉の方が一年程先輩だと思います。

②「共嫁ぎ雪に長靴ゆづりあい」平素無口で動作においてはこんな表現はとても望めない人なのですが、句の表現は矢張り私よりいくらかうまいなと思います。

③牛肉なればどんな料理でも人の三人前位ぺろり。笑泉曰く「牛肉をたる程食べて見たい」

○　大森風來子

①先輩がどちらかなどと野暮な問い

②決して僕に予選をさせない妻です。僕に似て負けず嫌いかも知れない。こつそり投句して抜けてから、これどうと…いう妻は、作句に自信がないのであろうか。

③サシミと茶漬

大森よしえ

①初投句をしたのが、夫が川柳を始めて二年位経つた頃でしようか。

②詩のリズムから生れる美しさを夫の川柳の中に求めています。川柳雑誌をめくり、一番に見るのは夫の句、そして好きな句がのつていると、ひとりでたのしんでいます。いつも私が口ずさむことの出来る作品の生れるのを見守つています。

③寿司

○　八木摩天郎

①こつちだんネ……

②まだまだへたくそ……作句に情況をうまくキヤツチして着想はよろしい。男の社会、女の社会どうものぞく社会が違うらしい。「集金をガツカリさせる共稼」で路郎先生にほめられた「雨ポツリみないち早く傘をさし」ラジオに朝からかじりついてよく似た句だと思つていたら、紋太先生に「みないつからか一の原句を修正して貰つてBK川柳に放送された事がありますが、これも心斉橋あたりで買物に行つて雨に逢うた経験から生んだ句の様です。

③作り・玉子、寿司、甘いものぜんざい、この外きらいなもん…何にもおまへん。

八木　徳子

①私が川柳に趣味を持ちかけたのは主人よりずつと後の事です。

②主人の作品は先年短歌をやつていたせいかどうも短歌調をおびた作風の様に思います「情熱の歌人晶子を思う海」の句をよく聞きます。

③寿司、お餅饅頭、洋食

○　岩本　素人

①同時

③酒、外なんでも

岩本　武子

①同時

③うなぎ、くだもの

一路集

古道具

大西八歩選

古道具蔵り替えられて又売られ　白水
父のほか値打わからぬ古道具　一路
テレビもう店先にある古道具屋　圭水
古道具屋もみて寝台をあきらめる　満秋
古道具市でみつけた九谷皿　卓風
古道具又嫁入りの化粧する　高志
古道具趣味が時代にマッチせず　和友
古道具交換会で値が上り　有子
古道具買つた後から智慧が湧き　伊津志
買つた店未だ覚えてる古道具　賀峰
古道具いわれの知れぬ銘があり　鶏声
古道具の趣味が掘り出す文化財　古心
古道具年に一度の陽を拝み　爺鉄
息子ではまだ眼がきかぬ古道具　正郎
道具屋も値をつけかねた古道具　粗粒
古道具御先祖様の箱の文字　雲平
鶏小屋の棟が上つた古道具　九呂平
骨董も古道具並で引取られ　天保銭
○思い出を断ち切る様に売り払い　不二
戦争があれば値の出る古道具　代仕男
値を見ては見直してゐる古道具　横寿喜
酔狂な人に買はれた古道具　南天
この疵が無いと値の出る古道具　京一楼
古道具年代別に撮影所　真沙魚
古道具務め果した色となり　雄々
古道具先代程に目が効かず　良坊
古道具買つて帰つて釘を打ち　トン坊
もらい手のない古道具の中に老け　山花
古道具未練が残りせまく住み　十悟
御先祖が足軽だつた古道具　素百江
古道具文化と縁が遠くなり　秋香
古道具笑つて居たのが買いに寄り　斜木
古道具差押えして持てあまし　喜久治
古道具暗い所に置いてあり　古竹
古道具の中に混つた金鵄章　雄声
落着いた暮し道具の艶に見せ　水堂
定紋があるばつかりの捨て価値　一簾
新築へ越してそぐわぬ古道具　十九平
古道具床へ飾れば寂びた味　恵二朗
古道具お役に立つた村芝居　万古
古ダンス嫁いだ頃の夢も剝げ　井蛙
運賃を払ふが惜しい古道具　鉄児
古道具店を出したい程たまり　満年
伴とは趣味の合はない古道具　千容

古道具屋ぼろくな値をつけて去に　東岸子
古道具それから趣味を語り合い　紫香
プライドがた古道具へ手をつけず　三林坊
馬鹿にしていた古道具に養われ　花団子
帳簿筒こんなところに隠し場所　太路
古道具ばかり殘した差押え　寛虚
古道具の中に大福帳見付け　白水
三代をへて古道具箔がつき　伊佐武
古道具ある日隣家の役に立ち　藤波
古道具古事来歴をつけて売り　同
古道具臍いて余命悉なし　一平
古道具貯めてる身分うらやまれ　同
逆さまにはめこんである古道具　ひか平
もう二寸どうにもならぬ古道具　同
嫁だんす据えて古道具倉に入れ　夜潮
古道具買つて名前に墨を塗り　同
古道具こんなに多い大掃除　凡八
古道具父の形見に取つておき　同
もう小言開きあきました古道具　凡九郎
古道具あきらめ切つた姿にて　同
さりげなく掘出物を買つて行き　白馬
古道具の中から取り出す金太郎　同
古道具やつぱり狸だけ残り　鮎美
古道具永病いの床にあり　同
亡き母の手あかの浸みた古道具　牧人
捍秤に乗せるのもあり古道具　同
古道具もチョッピリ入れて新世帯　ひでを
古道具やつぱり母は置いとく気　同
御考慮を願ふと道具屋置いて行き　光郎

名作は接いだ茶碗も金になり　同
掘出しの疵を惜しがる古道具　葉光
国宝の道具グラビヤ版で見る　同
古道具ほこりも拭いて値が高くなり　鳥石
夜逃げした後へころがる古道具　同
古道具さぐり合ふ気へ値が立たず　同
古道具の店も螢光燈をつけ　別城
目の利かぬ古道具屋でいてよくはやり　同
古道具に凝つて木の株まで集め　同
佳・古道具要には邪魔なものばかり　鳥石
佳・藤椅子も出して古道具屋の夏　南天
佳・伝来を持て余してる古道具　十悟
佳・古道具観音像にも値札つき　素百江
佳・古道具の中で生きてる幸を知り　和友
佳・古道具母の手入れが行き届き　葉光
佳・古道具売れて王手をかけたまゝ　成子
佳・古道具引手が一つかけてある　雄々
五・古道具値を聞いて見る雨宿り　正郎
五・ゴム靴の片つぽもある古道具屋　有子
五・古道具掘出しものゝ夢を買ひ　トン坊
五・捨てる気を又直してる古道具　十悟
五・書きつけの茶碗の肌のあたゝかく　翠露
人・人間の慾でたまつた古道具　雄々
地・古道具母が使えば役に立ち　同
天・情熱も燃えず古道具屋に坐り　香林
軸・古道具の趣味へ旅愁を忘れてい　八歩

社宅

大森風来子選

月給日昼をついてる社宅の灯　花団子
火叩きも防空頭巾もない社宅　同
やがて出て行くに社宅へ柿を植え　香林
配電の社宅はONで風呂が沸き　牧人
社宅からあらく出て行くパリモード　ひでを
風呂銭もいらぬ社宅に住み赤字　白水
町民税社宅大きな割を占め　別城
気兼して夫婦喧嘩をする社宅　水堂
恐妻の番附僕ものる社宅　寛虚
内風呂が欲しい社宅のぬかる道　同
社宅街同じ角度で国旗揚げ　緑風子
三年も拭けば社宅も光り出し　満年
自動車で帰れば社宅皆のぞき　同
サイレンがなつて社宅も昼にする　東岸子
二十年住めば社宅の主となり　千容
延びる子へ社宅だん〳〵せまくなり　恵二朗
社宅街産制夫人に牛じられ　同
社宅にも階級があり門構え　満佐志
松葉杖社宅の昼をもてあまし　鉄児
社宅から電話がかゝる月給日　十九平
社宅の子母のお里へ行きたがり　三林坊
住宅難社宅へ押しかけ同居する　葉光
上役の子を泣かしてる社宅の子　太路
社宅から尻を押された立候補　一策
社宅には本妻借家には二号　正郎
家賃だけ子供の名儀で積む社宅　有子
鯉のぼり社宅の屋根の狭いこと　春日
壁越しに隣りと話する社宅　卓風
社宅にも犬が増えてる社の景気　和友

社宅から盗人が出て陽が永し　鮎美
子を入社させて社宅に居坐る気　賀峯
石炭殻黒々繞く社宅道　光郎
豆腐屋のラッパは社宅の門で吹き　同
二号邸まで社宅とはよい度胸　満秋
社宅へは奥様むき袖の下　同
社宅から市議候補の出る時世　凡八
社宅では気兼して搗く杵の音　代仕男
煙突の影を落して来る社宅　ひか平
社宅から父娘が揃うて出勤し　幸子
平社員ばかり社宅の住み心地　九呂平
コスモスが三軒並んでいる社宅　雲平
辛抱は金なり社宅あてがわれ　古心
社宅から電話で市場へ寄らされる　同
手内職の看板もある社宅　成子
近すぎて社宅便利に呼び出され　水里
社宅からニコヨンに行く人も居り　九里三
幼稚園ほどに子供のいる社宅　雄々
行商へ社宅の主婦は輪を造り　辰始
社宅の子母のお里へ行きたがり　三林坊
五・斗争へ社宅も労資線を布き　井蛙
五・事務員兼二号社宅に住ませとき　葉光
五・鉱山の街社宅だん〳〵峯にのび　太路
五・倒産の会社へ社宅だけ残り　満佐志
五・社宅の種蒔きみな寄つてくる日向ぼこ　光二
人・サイレンに社宅の生活合うて無事　鮎美
地・首切りの噂妻から聞く社宅　万古
天・ストの日の社宅ラジオをやけにかけ　寿利庵
軸・社宅とは名ばかり廂の一間きり　素百々

いのちある句を創れ

花地物語

投稿規定 ▼用紙は原稿用紙▼文字は正確▼開催月日及場所記入▼締切毎月二〇日▼投稿先本社宛

本社六月句会（大阪市）

六月十二日　午後六時　於　光明寺

梅雨霖雨と云う言葉はあつても、流石は路郎先生は「天下の天気男」である。路郎師来会の六月本社句会は、傘も要らない、梅雨の晴間、すがすがしい夜の空気を吸うて、集う作家の後姿を見るのも、ユカイであつた。開会に続いて、北川春巣氏は、路郎師の「この雨に帰らしやんすか放射能」の句を始め、AT公等本誌から放射能を詠んだ川柳句を引例し、時節柄知つておきたい、放射能症の知識について詳述し、恰も川柳医科大学の観があつた。次いで路郎師の柳話は、最近の三つの変つた会合について、招待を受けた、産経会館のファッションショー、京都妙法院門跡の文人展、歌舞伎の寿三郎丈の祝賀宴の会合を述べ続々つめかけるファッションショーと作家の川柳熱、文人展と川柳表現、寿三郎丈と酒宴の会合、酒があつたら衆院乱闘も起らぬと、ユーモアたつぷりの川柳社会大学の講座もあつて、席題、兼題の披講に入り、本日の一日短期大学を了したのは、時に午後九時過、当夜の不朽洞賞優勝カップは木村水堂氏が把握した。（摩）

出席者＝路郎・鮎美・都詩子・潮花・水堂・真一・淡舟・凡九郎・武助・南風郎・十悟・雄声・ひろし・静馬・雅楽太・玲人・翠路・梨花・彌平・塗杖・幽王・与呂志・三司・夢生・一朗・一平・辰始・丁路・牛歩・新甫・文夫・光二・一の字・葉光・香林・井竿・一三夫・茂子・薄子・春巣・生々庵・賀峰・義英・杏花・一瓢・没食子・文秋・文蝶・摩天郎・花村・紫香・歌都路・留次郎・伊三美・小松園・梨里・葭乃

兼題「棚上げ」　麻生路郎選

棚上げにされた社長は碁を囲み　多久志
倒産の給料棚上げされたまゝ　高志
借金は棚上げのんびり暮す日々　季賛
棚上げをデフレの波に乱用し　辰始
気の弱い方へ棚上げ持つて行き　塗杖
棚上げをしてほしいよな借が出来　凡九郎
棚上げと言わず御無理なせぬように　花村
棚上げの額だけの株主となり　歌都路
いざこざを棚上げにして子が生れ　杏花
喋るだけ喋らせ棚上げ飲み込ませ　小松園
棚上げをする気と妓からんで来　梨花
棚上げで置く気軽う引きうける　潮花
どうせまた棚上げになる金を貸し　文秋
意見する父は古疵棚に上げ　静馬
棚上げのまんま転任命じられ　南風郎
棚上げ論なんとなく言え屋寝する　文蝶
棚上げへあの手この手がまだ効かず　幽王
棚上げの腹いせ会費出し渋り　没食子
棚上げを側近悲報として伝え　一瓢
棚上げの話電話へ重く出る　一の字
棚上げへ世間の風が冷たすぎ　幽王
外遊が棚上げされた日の首相　一の字
棚上げになつた縁談気にかゝり　淡海
棚上げの下で大きい口を開け　葉光
給料も棚上げ会社つぶれかけ　いさむ
棚上げをされていよ〳〵無口なり　淡舟
棚上げはしたが拙者に椅子が来ず　賀峰
盛り返せ出世払いにしてやろう　十悟
棚上げはされるまた〳〵つけにされ　塗杖
棚上げをくわした方も痩せてゐる　鮎美
虫のよい顔で棚上げ云いわたし　梨花
棚上げにされたまゝで世を終り　春巣
棚上げを伏せて盃くみ交し　水堂
棚上げはのぞむところと太く出る　路郎

兼題「名物」　水谷鮎美選

名物と一緒にほめる京言葉　一の字
集金が済んで名物買うゆとり　高志
名物を孫に持たせて母が来る　雄声
名物の本家と元祖に迷わされ　葉光
この街の名物老妓を旅に聞く　生々庵
餞別で名物買うて転勤し　いさむ
真知子が坐つたので名物になつた岩　彌平
団体が来て名物が売れて行き　杏花
名物へ婦人議員の声も入れ　一三夫
名物を留守番の子が取り囲み　杏花
名物の浜焼きさげて訪ねて来　一の字
名物のウニで呑んでる旅の雨　潮花
名物が順々に着く父の旅　香林
名物の踊りと唄で故郷が知れ　秋香
車窓から聞く名物の国訛り　季賛
名物が居ながら買える地下の街　静馬
神苑の名物ぽたん咲き揃い　賀峰
名物の一つ文化に消えてゆく　葉光
名物を大阪弁が値切つて居　水堂
名物も螢光灯の味となり　三司
嬉しさの二人兎に角粟おこし　小松園
名物にレッテルだけの味がなし　淡舟
名物で故人の姿思い出し　義英
名物の御堂をめぐる夕ざくら　葉光
名物へお上りさんは手間を取り　杏花
名物の味は明治のまゝでよし　春巣
名物がまだ揃わない見本市　賀峰
変つてるなと名物の蓋を開け　十悟
名物へ素通りをする雨となり　文蝶
名物の味を一切れずつ配り　京一楼
名物を買うてそれから酔うている　淡舟
二号邸で泊り名物街で買い　鮎美

兼題「隣り」　市場没食子選

珍客へ隣りで借りた酒を酌ぎ　水堂
お隣りは留守集金を立替える　静馬
夢破る電話隣りを呼び出させ　玲人
壁一重隣り長屋で仲がよし　牛歩
裏長屋隣りの時計に起される　与呂志
新婚に留守たのまれた両隣り　静馬
上げ潮へ隣りばかりが釣り上げる　三司
隣りから火種をもらう共稼ぎ　紫香
馬合わぬ隣りの席へ坐らされ　南風郎
隣家から帰つた下駄が違う朝　京一楼
壁に聴く隣りのヒスが面白く　文秋
お隣りの三味へ音痴が首を振り　潮花
隣り隣りと云う妻を叱りつけ　幽王
気の合わぬ隣りへもまがぶら下り　梨花
うちの子がいつも隣りなもめさせる　一三夫
お隣りも出勤らしい音になり　紫香
鯛買えば買うたで隣りけちをつけ　香林
儲けたんかいな隣りは派手になり　いさむ
不眠症隣りの頭突いて見る　武助
放射能隣りも魚買いびかえ　一平

親しさは隣りの鍵もことずかり　摩天郎
犬猿の隣りと知らず問い合わせ　井竿
パチンコ屋の隣りパチンコ屋に変り　花村
関取りの隣りで小さく撮される　新甫
隣りからよい御主人と羨まれ　春巣
アパートの隣り同志の民主々義　葉光
隣りへも頼んで帰る郷里の母　幽王
つきあいをさせぬ隣りへ売りたがり　へとち
お隣りの仲良さ内も仲が良し　葉光
筒抜けの隣があつて気が疲れ　雅楽太
お隣りも汚職の渦の中の人　玲人
世話好きが隣りのことに口を入れ　辰始
附け馬は隣りの前で待たせとき　花村
逆さ事隣りも泣きに来て呉れる　十悟
お隣りに先きを越されぬ籠の目　高志
急病へ隣りの足も借りられる　一平
隣より一桁違う寄附さゝれ　小松園
お隣りも値下げするから値下げする　摩天郎
親に似て隣りの子供よく喋り　水堂
仲裁にこりた隣りは寝しずまり　井竿
隣りの子わざわざ抱いて市場籠　彌平
お隣りの不幸へ休むきのうけう　没食子

席題「手加減」　木下幽王選

手加減をやめて最後の将棋盤　井竿
手加減を頼むもみ手のよく動き　彌平
手加減のない赤インキ太く書き　紫香
手加減を手をかえ品をかえたのみ　春巣
手加減をちょっと利かせば家出する　一三夫
手加減をするコツ妓知つて居る　賀峰
手加減が出来ず清貧まだ続き　雅楽太
子を叩く右手は手加減知って居る　一の字
手加減をしろと幹事の目が動き　夢生
手加減の網をくゞつて又生れ　一飄
叱るにも手加減を知る四十過ぎ　歌都路
手加減を感付いたのか泣きに来る　鮎美
手加減へ望みをかけた税のこと　文蝶
手加減がばれて紙上の人となり　一朗
手加減を知らぬ勇気をもてあまし　塗杖
手加減の裏に汚職の夢が延び　没食子
手加減もあつて目出度く学を卒え　丁路
手加減が過ぎて左へ子が進み　没食子
手加減を強要させて居る名刺　潮花
手加減につけあがらせる癖がつき　ひろし
手加減の相撲に子供きりがなし　文秋
年頃にありがちなこと捨てゝ置く　歌都路
手加減をきびしく母の鹽がこがめ　淡舟
手加減の上目つかいの妻すなお　鮎美
にくらしい口へ手加減してひねり　井竿
手加減を気付く六月雨がもり　幽王

席題「雨上り」　長谷川三司選

サンダルの顔が明るい雨上り　玲人
持ち玉を煙草に替える雨上り　同
雨上り近所の傘が飛んで来る　南風郎
雨上りまだ六甲は見えぬなり　賀峰
雨上り運ちゃん降りて空を見た　幽王
雨上り皆んな歩いてゐる公園　彌平
雨上り出好きはじつとしておれず　春巣
雨上り夕陽が紅い駅に待ち　牛歩
子が虹を屋根でほめてる雨上り　花村
末つ子が小遣ねだる雨上り　幽王
一坪の庭も青葉の雨上り　彌平
長靴でぼそ〳〵帰る雨上り　没食子
雨上りの虚ろへ悪魔は笛を吹き　鮎美
雨上りちとものたらぬ蛙の目　生々庵
雨上りむかいの窓もあける音　紫香
吾が庭を美しと見る雨上り　歌都路
雨上り物売りの声澄みとおり　花村
雨上りもう金魚屋の声がする　幽王
長靴の足が重たい雨上り　淡舟
雨上り又修繕の個所がふえ　梨花
ゴム長の言い訳ばかり雨上り　春巣
雨上り橋筋へ人通り　井竿
雨上り鼻緒の切れた下駄を提げ　杏花
カウントの話のはずむ雨上り　ひろし
雨上り女の嘘を聞き流し　春巣
雑草の露も嬉しい雨上り　香林
花びらへ鯉が浮いてる雨上り　潮花
濡れて待ち呆け晴れてからと去に　鮎美
雨上りこんな大きいみゝずが居　夢生
雨上りゲロ〳〵とまだ雨を呼ぶ　翠露
雨上りネオンが招くように映え　水堂
雨上り未だ会場は人まばら　賀峰
長靴の子と子が走る雨上り　紫香
雨上り一人世帯が家をあけ　水堂
雨上りてる〳〵坊主へ虹が出る　杏花
雨上り陽ざしは汗を滲ませる　没食子
雨上り兎も角出たい浴衣がけ　武助
すだれから虹がきれいな雨上り　潮花
カキ船の障子があいた雨上り　同
雨上り結局負けたので帰り　三司

席題「走り書き」　富岡淡舟選

走り書きいつもの場所と書いただけ　彌平
来ぬ人に未練残した走り書き　せい一
走り書き渡し社長は今日も留守　文蝶
口紅もついて酔うて走り書き　鮎美
走り書き二度と逢わないつもりなり　紫香
答弁資料秘書が渡した走り書き　ひろし
走り書き暗号に似た置手紙　生々庵
鉛筆がとがり過ぎてる走り書き　文蝶
走り書きメモ一枚が見つからず　ひろし
走り書き新らの帽子を置き忘れ　鮎美
走り書き自転車汗の手で握り　南風郎
走り書きとは忙しい心中　幽王
走り書きの一つは国の母にあて　摩天郎
走り書きフン〳〵フンと云うて捨て　彌平
結局は家出と決めた走り書き　三司
走り書き晴れて添われねばも述べ　雅楽太
死にますとだされ丈けの走り書き　一の字
人柄がそのまゝにぢむ走り書き　生々庵
受付もうまいと思う走り書き　紫香
走り書きお膳に載せた妻の留守　都詩子
走り書き然し死ぬとも思われず　賀峰
理性とは別に夜汽車の走り書き　武助
愛情につい泣けて来る走り書き　潮花
走り書き時代のずれへ目をつむり　武助
絵はがきに死の走り書きひゞまれ　鮎美
手がかりになることは知らぬ走り書き　一飄

雑川　**梅田支部句会**（大阪市）

六月五日　於　阪神ビル三階

水谷鮎美報

だいそれた約束酒がしてしまい　一夜
約束へうかつ改札二つあり　夢生
青葉また巡り来つた三回忌　悦朗
囚人車青葉の並木ぬけて行　杏花
青蛙あおぼのなかで虫を捕り　鮎美

雑川　**阿倍野支部句会**（大阪市）

四月二十六日　於　西光寺

須崎豆秋報

貸切りのバスでも立つている幹事　賀峰
先生は立往生の貸切車　万楽
貸切は動く途端に飲み初め　香林
貸切車客をおろしてねむくなり　若菜
切手まで添えた帰還の問合せ　多久志
延期とは知らず夜行の客となり　太路

行違いどちらもお茶をよばれて居　葉光
経理課が今年の赤字腑に落ちず　博也
この月も赤字だつせこ酌いでくれ　豆秋
お花見は春衣の事でもめて止め　白水
帰りまで寄るとこがある娘の春衣　六竜子
早合点拒否と解釈した家出　十梧
線の上のんきな雀うらやまし　翠露
五線紙の上の花片そのまゝに　水客

雑川　**淀川支部句会**（大阪市）

六月九日　於　香林居
武部香林報

よゝとなく女形の膝もなまめかし　発中
膝の手にぐつと決意の力こぶ　朝風
方円に従う水に似た養子　水堂
代筆屋に頼めと役所ソッポ向き　真一
代筆を頼まれ切手もまた借られ　花村
代筆の智慧も借りてる無心状　野甫
代筆も気になる恋のあとしまつ　敬二
すれ違う人が振向く二人連　文平
お二人でおいでと温泉招いてる　多久志
二人して貯めるを姑淋しがり　香林
お二人様と云われて固くなる二人　若菜

雑川　**堺支部句会**（堺市）

五月二十二日　摩天郎居
八木摩天郎報

兵子帯を締めて会社の疲れ癒え　武助
晩酌へ算盤を持つ用が出来　南風郎
晩酌の父へ将棋の連れが待ち　玲人
御降下にオスベラカシのお姫さま　摩天郎
日給へ地下足袋厚い捺印捺す　莫平
大男嫁の話にちつとてれ　雄声
折鶴の外は折れないお姫様　貴山
世を忍ぶ姫へ箱根は暮かゝり　春翠
政略を心得て嫁ぐお姫さん　葉光
卒業をさせて地下足袋まだ履く気　迷舟

雑川　**池田支部句会**（大阪府）

五月十七日　於　阪急電鉄四階会議室
黒川紫香報

あの強気あつて社運を挽回し　球児
強気でも勝てぬデフレになりまた　正斗
強気になつてねと彼女のイヤリング　雄声
小娘の強気に暮したすけられ　水客
俳のそのテツペンにいた悪魔　凡九郎
意地のある女を悪魔もてあまし　一の字
ろうそくの影は悪魔になつてゐる　紫香
ビルの窓悪魔が這入れる程にあき　白渓子
落ちる丈け落ちて悪魔と縁が切れ　杏花
悪魔ふと妥協の出来ぬ身を嘆き　梨花
笛を吹きながら悪魔が寄りそはぬ　鮎美
人肌でよみがえらせた添えぬ恋　都詩子
妻四十ヌードの肌へ嫉妬する　三司
放射能消えそうな気がするわさび　清
やりくりのリユック子供はよくねむり　圭三
やりくりのいらない家で病み続け　武助
朝やけを乗じるへさき沖へ向け　一夜
かへり船夕陽の色を着て静か　潮花

雑川　**日立櫻島支部句会**（大阪市）

六月十日　於　日立造船桜島工場
真鍋一瓢報

どつちみちお喋りだから秘めておく　一舟
おしやべりの手が面白く動くなり　花美
君じやから言うがさお喋り言いふらし　呑水
お喋りをあわてさせてるコンロの火　望峰
お喋りと知らずに何も彼も話し　錦水
片ちびの下駄でしやべりのまだ去なず　紫香
傘ひとつ持たせて二人送り出し　遊二
もあい傘きうくつそうな肩がゆき　清潮
まだ話あるのに着いたもあい傘　凡十
もあい傘男の方は馬鹿に見え　ひさみ
橋筋を東へ折れたもあい傘　潮花
お茶室はぼたんを賞める窓をあけ　千代美
花束を抱いて楽屋の口で待ち　豊子
軸にちと不似合と言う花昌蒲　花奈女
湯の町は春山吹が咲きみだれ　花子

雑川　**貴生川支部句会**（滋賀県）

四月十日　夢生居
黄瀬美秋報

社宅街人員整理に又さわぎ　研王
水害の来そうな社宅をあてがわれ　夢生
長男の嫁へ親族会議の灯　美秋
結婚へ社宅あくのを順に待ち　木人
呼べばすぐマージャン出来る社宅街　宵詩
住宅難社宅で笑う声を聞き　四苦峰
家建てる野心は持つている社宅　春巣
長男にほしい度胸が次女にあり　紅月
花吹雪花吹雪カネはなし　魚吉
花吹雪その日本が好きで住み　斗志
試験前母子ともゝ夜を更し　柳月
もらい風呂流す音にも遠慮勝ち　綾子
女房を代理にやつてする昼寝　凡骨

雑川　**京都支部句会**（京都市）

五月十六日　於　仲源寺
大鶴喜由報

アルバイト海の向うをあこがれて　亀一
洋行の帰えればあわれBランチ　司郎
あちらではと言う洋行は三日間　紫蘭
洋行は身なりばかりが板につき　蘇海
見晴しの窓は美しい人とゐて　晴芽
見晴しのよい丘に住み赤瓦　九角
見晴しのよい部屋すでに予約あり　亀一
転勤の机を拭いて言葉なし　紫蘭
寄つて来る鯉とむすびが楽しそう　寛一郎
暗い灯に一時預けの犬がなき　紫蘭
遺言と共に弟は預けられ　ゆきら

雑川　**鳥取支部句会**（鳥取市）

五月十六日　於　いすゞ店
大西八歩報

釣る真似で明日の日曜日を誘い　日満
貧乏はしても祭の好きな国　ひろし
み興ねる腰が伸びたり曲つたり　村諷子
日本の五月祭で明けくれる　天保銭
お祭に濁酒の秘密も聞いてくる　耕民
遠足のうしろの方は走らされ　山人
遠足の列はのびたりちゝんだり　法泉子

SKT
新聞インキ　印刷インキ
謄写版インキ　印刷ワニス
謄写版　輪転謄写機
輸入印刷材料　放送用品
株式会社　阪田商会
大阪市北区芝田町五二
電話福島⑮5631—4.5991
支店　東京・名古屋・九州

偉方のきき酒庶民うらやまし　明朗
酒酒酒花は男にいい世界　かよ子

みをつくし川柳会（大阪市）

五月十一日　於　天王寺中学校
戸田古方報

喜怒哀楽面白かろう第三者　古方
出勤の機械にも似た正確さ　のぼる
どうしても機械で出来ぬ職に生き　雄声
機械化を憎む仲間に僕もゐる　凡九郎
やっと芽がふけば我が子に病みつかれ　梨花
白であってほしい祈りが差入れる　翠露
自惚れが自信がもろく崩れる日　正斗
新流行鏡を見てはよすときめ　光二

南海電鉄川柳会（大阪市）

於　親和寮
友洲貴山報

籔医者の家業息子が譲り受け　圭水
籔医者にすれば病気が殺してい　貴山
子が死んだ事も籔医のせいにされ　摩天郎
連休のその一日は寝るくらし　武助
どこへなと連れて頂戴連休日　摩天郎
連休にせめて故郷の墓を掃き　武助
哲学のわからぬままに死をえらび　のぼる
宿の名も知らず団体ついて行き　雄声
ワンマンのままに団体うごかされ　凡九郎
団体が8字にならぶ宝塚　春翠
団体は一割引で立ち続け　貴山
団体で行く老夫婦手をつなぎ　雄声
春雨も無情団体ぬれている　貴山
団体の一人をパチンコ屋でみつけ　春翠
団体を口実にして立寄らず　路郎

角一川柳会白鷺会（大阪市）

六月十九日　於　角一ゴム
榎南夏六報

祖母の肌元粋筋の艶を持ち　志津
妻らしくなつたは肌が荒れてから　翻骨
美しい肌人形として買われ　おさむ
ふとふれし肌初恋の思い出よ　一草
売れ残り結局家の者が食べ　みどり
売れ残り忙し想な人通り　夏六
雲の果てまで心友の愛が伸び　一子
飲みさしのお茶が冷えたら別れ　和夫
冷えたお茶色よい返事でグッと干し　正巳
食堂に誘うてからのお交際　二桂

帝化川柳会（大阪市）

五月二十一日　帝国化学大阪工場
佐野白水報

今日もまた職にあふれて来たベンチ　甲子朗
プロポーズさ様ベンチへ子と坐り　一平
行楽へベンチも春を待つ化粧　一朗
睦じく語るベンチに春日さし　乱酔
撒水車一ト息入れる俄雨　盆十
撒水の程度で逃げた俄雨　華泉
打水を型の如くに小料理屋　三平
散水車まゝごと遊びを慌てさせ　葉乙女
板張りも住めば都の住宅難　登志晴
板塀にやつと旧家の名残り見せ　雅楽太
雨止んでからが荷になる傘を借り　京一楼
雨を待つ子に新調の雨具あり　耕山
行楽の足浮きたゝせた通り雨　英治

明和川柳青蛙句会（西宮市）

六月十三日　於　明和病院事務所
山本九里三報

売れ残りこれはもうけの外にあり　鶏声
ほろ酔の誰か相手がほしい宵　至不也
幹事だけ悪者になつて事がすみ　金太郎
代筆でひつこい恋のおことわり　白馬
ほろ酔に吹く風なのし生きてあり　白涙
気安めはやめてと涙おちそうな　成子
値をさげてみたはさやっぱり売れ残り　満秋
代筆へ恥を内緒にしてもらい　牧人

大万川柳から

「妾宅」（第二十五回）
(人)いい気味だは妾宅が小火を出し　半絃
(地)忙しかつたように妾宅から戻り　八ッ茶
(天)妾宅の弱味老いたる母と居る　青丹子

「客席」（第二十六回）
(人)客席へ出ると陽気な子とかわり　春巣
(地)客席でたすき外せともてゝゐる　梅志
(天)客席で金がもの云う辞儀を受け　ただみ

「週末」（第二十七回）
(人)週末の夜はズボンを脱いで寝る　賀峰
(地)週末を切符二枚の剪れる音　寛虚
(天)週末を知らぬ社長をもてあまし　ただみ

「声がわり」（第二十八回）
(人)声がわり師匠の撥が恐くなり　吊声
(地)声がわりクスッと姉に笑われる　博也
(天)声がわり母は背丈をジロリと見　陽炎

「毒味」（第二十九回）
(人)では毒味しますと先に箸をとり　十九平
(地)毒味した後とも知らず蠅が来る　春巣
(天)出しやばりがちゃんと毒味をすゝしこり　大介

「夜店」（第三十回）
(人)繁昌の夜店隣りを手伝はせ　美能留
(地)人込みを避けて裏から見る夜店　鉄児
(天)口実は夜店一人で呑む気なり　三司

「女難」（第三十一回）
(人)このところ女難つゞきで痩せました　梅里
(地)忙しく儲け女にみなとられ　芹花
(天)人の道説いて女難は避けられず　方大

「胡座」（第三十三回）
(人)職人に胡座のかけぬ目出度い日　寛虚
(地)花嫁が退がると一座胡座組み　美婦適
(天)隣席も長旅らしい胡座組み　牛歩

「相惚れ」（第三十三回）
(人)相惚れが喰いつきそうに寄かかり　夜潮
(地)相惚れは釣銭渡すのも忘れ　貴山
(天)春雨の中を相惚れ急がない　十九平

「税金」（第三十四回）
(人)税叩きつけて熟睡してみたい　谷水
(地)パトロンの酔わないうちに税のこと　千舟
(天)思案する徴税令書へフケが落ち　夜潮

「刺身」（第三十五回）
(人)お刺身を生かすお酒を買いにやり　万古
(地)気のおけぬ客へ刺身は舟のまま　芹花
(天)素人の刺身半分手で並べ　千舟

「笑顔」（第三十六回）
(人)母の手に戻りいい顔惜しげなし　日満
(地)失恋の淋しい笑顔だとわかり　和友
(天)時間来て芸妓の笑顔改まり　一心

（廿八年度・天・地・人・のみ掲載）

季節一品料理
江戸前にぎりすし
アベノ橋地下映画食通街
梅里の店　大萬

★大万川柳（第四十二回）を募る
兼題「ビルの窓」　路郎先生選
締切・七月十五日　句数五句以内
発表・七月二十一日（店内掲示）
投句は　阿倍野区松崎町三丁目
一〇　大万川柳会宛

公・私・雑・記

★毎号誌上に新鮮味をみなぎらすため編集部は懸命の努力を続けて居る。一層の御支援願いたい。★前号で、一寸希望を述べていた阿波踊見物と鳴門観潮の会をいよ〳〵八月十四日、十五日（表紙裏広告参照）に実現させることにした。本社で企画していたが毎日新聞でも企画していたので、相談の結果、毎日のお世話を願うことにして、社は川柳方面で、おもしろくユカイに旅をすることにした。従つて川柳関係はこちらへ申込んでいただきたい。この会は川柳を作らない友人でも、家族でも参加出来ることにしたのでせい〳〵お誘い合せ願いたい。本誌の表紙でお馴染の福富雷童、米田三男之介両画伯も参加されることになつている。船中座談会などもやりたいと思つている。揃いの川柳ゆかたで阿波踊の稽古もしたいと思うがコレはゆかたが間に合うかどうかわからない。しかし踊りの稽古は是非やつてもらうつもりだ。踊りに自信のある方はドシ〳〵出かけて欲しい。★第一回の「川雑川柳まつり」は各地とも予想以上に盛会だつた。大阪でも川柳行燈の下に多数の作家が集つた。殊に散会後の有志懇親宴は、毎月やつて欲しいと云う希望者があつた位である。会の状況や特別課題「誕生」の優勝者は次号で発表することになつた。果して誰れが優勝するか、どこの会へVENTOの楯が行くか、次号を期待されたい。★私も大分元気をとりもどした。しかし、日々の仕事が激務すぎるので眼がかすんでこまる。こんなことは、これまでに経験しなかつたので、大いに警戒につとめている。これから暑さも更にきびしくなるので諸君も自愛第一にされたい。（路）

不朽洞会から

▼清水白柳子氏（大阪市）は八月十四日午前六時三十分BK放送川柳（第二放送）課題「ネオン」の選評をされる。▼戸倉普天氏（兵庫県）は目下、氷上郡沼貫村村誌の編纂委員長として古文書の調査や民俗考察に苦心されている由▼福田山雨楼氏（横沢市）から六月二十二日付鉛筆書のハガキ（路郎先生宛）では「啓、十七日午睡の時うわ言を云つたり、眼まいがして眠れなかつたり、血圧が百以下に下つたり、このところ病状あしく、われ乍ら憂慮しております。医師もシューブを記していると病気悪化を気遣つてくれております。大分落着きましたがまだ時々頭を動かすと軽い眼まいをします。マイシン、パスの併用療法はつづけているのですが、或はマイシンのせいで眼まいをするのかも知れません、でこのところ一回だけ注射を休みました。気が弱くなつて悲観的なことばかり考えます。毎夜凄い夢を見ます。そんなわけで絶安を続けていますので句及原稿は休ませていただきます。梅雨空を早くぬけ切りたいと思います。」と。一日も早く原稿がら〳〵と書ける日の来るようお祈りする。▼永田六竜氏（大阪市）の消息に依ると坐骨神経痛のため北野病院へ通院されている由、勤務後自宅で横臥「苦しさに注射針今日は祈禱の座」の句を寄せられた。▼小西無鬼氏（兵庫県）は兵庫県篠山町婦人会へも柳話に出かけているので、近い将来に婦人作家が多数生れるとのこと▼福島鉄児氏（岡山県）は川雑弓削支部主催で恒例の西日本川柳大会を九月十九日に町村合併祝いを兼ねて開催、その準備のために多忙な日を送つていられる由なお六月十三日には直原七面山氏と岡山の服部十九平氏を訪問、市内グループの会へ出席された▼麻生葭乃女史（大阪市）は六月二十一に疎開荷物を纒めに奈良県の上田翠光氏居を訪ねられ、荷物搬出予定の二十三日が雨のため中止し二十三日に帰阪された▼初代川柳省像入りの本社旗も相当年代を経たので今回富岡淡舟氏（大阪市）の肝入りで新に本社旗五本新調、不日納入される運びとなつた。同慶に堪えない。▼本田恵二朗氏（岡山県）は去る六月十日から二十一日まで田植期間歯科のひまをぬすんで下津井海岸に起居され、カメラを手にして、手当り次第に撮影されていられるとのこと▼私は七月三日堺市保護協会一行と堺市のバスで京都宇治少年院及京都医療少年院を見学、黄檗山万福寺へ廻遊、「先生より一月後の普茶料理」を味いつゝ作句した。▼井野格一氏（岡山県）は今回岡山市東古松町三一山陽新聞社宅十五号へ転居▼牟田一哲博士（大阪市）方では電話の局名が大阪（26）と変更された番号は元通り五〇〇〇番とのこと。（摩）

新会員紹介

六月

藤井明朗（島根県）正
緑之助氏推薦

七月

永松東岸子（岡山県）正
久米雄氏推薦
小畠無聖（兵庫県）正
無鬼氏推薦
野田素身郎（倉敷市）正
千容氏推薦

正誤

▼七月号二十九頁席題「蠅」魚屋がくると二三疋置いて行き白水氏とあるは、多久志氏の誤り▼七月号三頁下段二五行目、「…ほめてほめて」は「ほめて」の誤り▼五月号句会兼題「首相」の「写真班そこのけ〳〵首相が通る」は南天郎氏の句と判明。

暑中御伺

川柳雑誌社編輯局

麻生路郎
福田山雨楼
麻生葭乃
麻生梨里
戸田古方
市場沒食子
北川春巣
丸尾潮花
眞鍋一瓢
八木摩天郎
中島生々庵

気疲れをのこし遠足無事にすみ　粗粒
鯉のぼり目当に道をおしえられ　三歩
風やんでのぼりは棟で尾を休め　喬水

雑川 浜寺病院支部句会（大阪府）

五月二十日　　膳所新三報

ノスタルジヤ電波のジヤズが慰める　利坊
慰めてくれる道化へ腹が立ち　雅方
弁当は持参ミミチイ社の慰労　文糖
ちょっぴりと慰め古着屋値を付ける　夢郷
慰める方も自信のない体　ATT公
慰める母へ笑つて起きて見せ　漫多郎
慰めの言葉もつきて座はしらけ　思酔
仲人の写真へてんと振り向かず　溪泉
当選は胴上げされるとこも撮り　風鈴
三人の写真早くも一人欠け　業平
特ダネに気兼のしない写真班　黒ん坊
スナップのこんだポーズに笑い合い　勢園
酔つたのが居てファインダー疲れ切り　風順
療養も古参になつて写真ふえ　光月

雑川 玉造支部句会（大阪市）

五月十五日　　白柳子居
清水白柳子報

水槽の二度の務めはもう御免　白樺
いたずらにかけた電話が警視庁　章子
砂埃り近所競うて水を打ち　友森
雨降れよ又動力が止まるがナ　甚也
打水に隣の花もちとのぞき　たけ緒
水煙りそれから橋の人集り　六竜子
安さんも男をあげた茶碗酒　もりた
モシ〳〵は亀が電話のお家元　一正
マイクロウエーブ月が鏡のより以上　一栄
送話器を押えてソツト打合せ　雅美
食事中電話つんぼにしたくなり　草白
呼出しが飯時ばかり掛つて来　白柳子
帯といてハツと気のつくかくし金　美奈美
また違うどれがほんまか電話帳　時鳥
呼出の電話おかずのにほいかぎ　健司
出張の父の電話に子がかわり　真沙魚
電話口内緒の話まで聞え　都詩子
人通りほこり気になる野弁当　灘の井
友情できせた雨傘ひやかされ　上野
友情も嫁ぎし後はうすれがち　清子
七五三身に重すぎる結び帯　朝路

雑川 宇部支部句会（宇部市）

半休居
国弘半休報

遅刻して何度も議事を聴きかえす　半休
ヒロポンに青春を謳い青春を消し　粗影
ぬれ燕傘を覗きに又返えり　井蛙
遅刻することにきめてる二日酔い　青水
雨となり夫の傘へ親子で来　午雙
子の寝顔見える所で針仕事　呆鴨
母の日に代つて炊いたこげど飯　基月
父と寝る約束母と寝てしまい　美爽子
見送りに踏みにじられた紙テープ　峯松
開港の出船涙もあるテープ　万盛
マドロスは港々に花咲かせ　雪峰
出征と同じ港の引揚船　かずを
国際空港国産機の見当らず　川鯉
新妻に港の船が待ち遠し　敏雄
又注射医者の鞄が目に痛し　美学
引揚者港の声に立ち上り　徳風
良く叱る父であつたと母も老い　風来坊
家計簿の赤字母には黙つて居　正夢
亡き母の自慢の一つ手打そば　風柳

雑川 備前支部句会（岡山県）

四月二十四日　於　娯句楽居
浜田久米雄報

女湯のトップは今日も囲い者　節人
女湯の鏡ヌードにあきました　十九平
入学試験金一封で合格す　迷久
金一封も一度礼を言いに行き　東岸子
金一封煙草を買つただけで済み　浄美
金一封幹事はあつく礼を述べ　春巣
絵馬堂の処でやつと腰をのし　運平子
絵馬堂の絵は神風が吹いており　柳風子
信心気ないのが絵馬を見て廻り　駄流児
絵馬見えたとこで石段ふみ外し　娯句楽
葉桜の下で初孫抱かされる　緑雨
葉桜の頃ほとぼりがさめかかり　久米雄
残り福などと神社も抜け目なし　淡舟
ぼたもちが一つ残つた皿の上　甘井子
受付へ又あらためて弔詞のべ　半仙

雑川 下関支部句会（下関市）

六月十三日　於　下関駅
石川侃流洞報

スキヤキの母は玉葱ばかり喰い　半休
感謝状戴く太い手が震え　藤四郎
重役の釣は世話役五六人　白馬
待ち潮の糸垂れたまま火を付ける　妻揚子
素うどんで済ます耐乏期の夕餉　土筆坊
配給の不足うどんで喰いつなぎ　井蛙
釣銭を約束してる子の使い　良坊
一生を托す公社を首にされ　ほなみ
釣舟へ釣り下手一杯しのばせる　雪達磨
釣天狗同志仲よく河岸を変え　仁美
子の記録電波の前で涙ぐみ　伊三男
給料の遅配欠配ない公社　みつる
レクリエーション交通公社の智慧を借りワンピース肌を出す程ニユールック　蘇人
市場籠下駄履で来るワンピース　柳慶
釣竿にピクこれだけが父の趣味　柳蛙
村長閑軒の玉葱一つ落ち　吾郎
ワンピースあなたの胸は開きすぎ　九呂平
前だれの気持を公社訓示する　倪流洞
葱を煮る母は仏間をまづ閉める　阿岐良
釣竿の尻で浅瀬か瀬ぶみされ　戊理智
釣れますかイヤー煙草に火をつける　司楼

雑川 弓削支部句会（岡山県）

六月五日　於　戸川商店
福島鉄児報

終列車迄は望をかけて待ち　貞子
残業の此頃馴れた終列車　紫舟
終列車までは妻は賃仕事　周甫
終列車までウナ電の人を待ち　四郎
乗越しへもう間に合わぬ終列車　騒人
終列車舌のもつれる二人連　流風
改札は欠伸で送る終列車　里楊
終列が出てから拾う泊り客　藤史郎

恋人と遊びほうけて終列車　桃々
おでんやもしまい仕度の終列車　大公望
終列車までは飲む気の腰をすえ　正平
終列車スリも疲れたように乗り　文郎
終列車うつかり出来ぬ客と座し　野人
終列車におくれホームで夜を明し　南山
終列車ポリも闇屋も寝てしまい　紫陽
始発まで待つんですな素気ない　里楊
終列車名残のつきぬ肩を寄せ　久米女
くたぶれた恋も乗つてる終列車　青山
マネキンに似合う浴衣を買うて去に　笑年
浴衣がけ三味も弾けない芸者来る　牛歩
目に青葉はやマネキンの着る浴衣　明峰
もう娘ではない曲線の浴衣着て　笑鬼
特価品又買つて来た不要品　人生
買い添えた特価品だけむだになり　秋夫
特価品貧しい妻の瞳をうばい　久米女
特価品だけの寿命でもう破れ　好郎
問屋から別に送らす特価品　富至
まねく灯にまさるすさんの気はもぞろ　すみを
相図する様に堤の灯がゆれる　花子
ボーナスの近い事務室灯がともり　巷雨
やかましい親爺に逝かれ灯が消えた　よしか
灯を消して寝るには惜しい風を入れ　鉄児
書留で返されて来たラブレター　三平
これぼちの利子書留で届けられ　百郎
書留へ隣りの判を借りて捺し　七面山
行く先は母だけ知つている家出　笑泉
許す気になつて家出の娘を探し　耕雪
ナイロンの風呂敷一つ家出の娘　寄童
滞納の鐘頭役場に勤めてい　笑柳

雑川　**大聖寺支部句会**（石川県）

六月十三日　於　光郎居　野村味平報

二三べん仲人が来て仲直り　酔羊
仲直り親の後で又泣かせ　素百々
仲直りすればやつぱり親子なり　魯木
つらかつた気持を汲んだ仲直り　武富
子の事で黙つて居れぬ仲直り　とよ
味曾汁のない朝飯を汽車で食べ　卓風
朝飯を食つて寝直す旅づかれ　桃園
朝飯はパンとミルクの嫁が来た　芳子
倦怠期茶漬の朝もある生活　光郎
マネキンになつて世相が良く解り　久雄
マネキンの人形が着れば美しく　和子
おあつらいが来てマネキンは脱がされる　味平

雑川　**篠山支部句会**（兵庫県）

小西無鬼報

手も出せず足で蚊払うパチンコ屋　大葉
思ひ切つて蚊の叩かれぬ児の寝顔　左文字
逢曳の何処へ行つても蚊に咬まれ　ひか平
年寄へ喜ぶ風呂の下を焚き　菊
書きつぶす程喜びが現せず　白猫児
喜びが一人で惜しくジヤズかかり　無聖
当選の見透しソプラノへ深くかり　無鬼

雑川　**倉敷支部句会**（岡山県）

六月十三日　於　水島公民館　田垣方大報

かつぎ屋の定期は口でくわえて出　千代春
定期の娘婚期忘れた稼ぎよう　谷水
かつぎ屋が此処で荷を継ぐ定期券　斜木
定期券買つた翌日首になり　草人
定期券たつた三日で首になり　閑人
見晴しは壮観おむつ旗のよう　一念
見晴しはいいが来る道けわしすぎ　素身郎
見晴しへガイド覚えただけ饒舌り　呑長
踊れない俺へ喫いさし呉れて行き　馱仏

堕ちるだけおちて悔なく煙草喫う　秀魁
朗らかになれと女給に叱られる　星光
叱るまい叱れば嫁に角が出来　井泉
客に出す茶菓子ほしい子目で叱る　実穂
叱つては見たが気になる部屋の闇　桂月
叱らねばよかった死んだ子を想い　晴路
叱る役きめて子供を呼びに立ち　一善
父親も叱るすどさもう鈍り　香春
ガン首の伴奏入りで叱る父　吉男
ヒロポンを叱つてくれる人もなし　夢刀
反対の理論素直に聞いてやる　白楊
家出までして反対を通した娘　正司
反対の意見へ拍手まで起り　越鳥
反対が好きで一言居士にされ　風の子
親と子の対立時代が開き過ぎ　昌月
反対の立場へ条件つけて折れ　鯉風
反対を押し切つてからの狭い道　春日
長生きを同情される不倖　聴牌
社会科の一助と出された故老談　秋水
長生きはマイナスとなる日を送り　万古
長命の相と言われて危禍に合い　可笑
死ぬ程の恋をしたともみえぬ皺　天風
恩給のある長生きはとうとばれ　千客
釣銭を驚づかみした発車ベル　方大
拡声機うるさがられて空に吠え　日出雄
ハンストの空に日が出て気がゆるみ　馬楽
落ちぶれて空も見えない処に住み　加志子

雑川　**大原支部句会**（岡山県）

六月二十四日　於　十坊居　本田恵二朗報

一押し二押し三のきめ手の金がなし　秋芳
鼻息の荒さデフレが来ておさえ　恵二朗
おわい屋を追い抜いてから鼻かみ　野川
鼻水で年を見抜かれ放つとかれ　十坊

八釜しい音へ手真似でものを言い　地久平
八釜しい人やつたなと着る喪服　米花
八釜しい女房の留守でもと淋し　一山

雑川　**赤坂支部句会**（岡山県）

五月廿九日　於　出屋公民館　政田大介報

一人娘の恋に家中疲れ切り　土生
あの人は野暮な人よと惚れており　佳目夫
少々は嘘でも無事と書く便り　竹堂
お隣りの無事も一筆ある便り　雨水
無事な日が続き倦怠期が続き　一柳子
ハンサムと云われた僕に野暮な妻　苔石
一人にも期待かけてる投票日　友月
鍬を持つ手に琴爪の小さくなり　水仙
農繁期爪は斜めにちびたまゝ　舟楽
王手飛車かけて便所へすつと立ち　一流
幽霊にも会う病院の夜の便所　美由
木犀が咲いて厠も好い香り　花蜂
義理だけの案内下座を一寸あけ　千流
一人で置いてと女泣くつもり　宇柳
当分は自炊と一人で赴任する　兼比羅
寄附貰う腹で案内状を出し　三四詩
交番で盗られた方が注意され　竹林
逢曳の疲れストッキング脱ぎ捨てる　大今
遺慮なく素足投げ出す程に酔い　玉露

雑川　**木次支部句会**（島根県）

五月十日　於　木次町役場　藤井明朗報

八十の祖母はショックのない暮し　綾美
卒業もやつと就職亦やつと　清夢
人物も出来挨拶も立派なり　迷調子
よいどれの客に手をやくパトロール　正夫
先妻は程よく酔わすすべ　西実

柳・界・展・望

▼本社八月句会は八月七日（土）午後六時から下寺町二丁目市バス停前の光明寺で開催される。幽邃境さながらの寺院の句筵は避夏に好適、多数来会されたい▼七月十日の「川雑川柳まつり」は、本社各支部並びに本社系団体で全国各地に多彩な催を以て開催され、川柳昂揚、柳人交歓のため寔にふさわしい催として各方面から多大の好評を博した（詳細次号掲載）本催しに際し関係柳友の御尽力を誌上から謹んで茲に感謝する。▼南区医師会文化部杏林川柳会は七月二十日午後六時半から比呂史居で開催▼大阪逓信病院鳥ヶ辻川柳会青葉吟行は六月二十日午前九時京阪天満駅へ集合、京都の建仁寺で句筵を持ち引続き懇親宴を催し散会後各自京都の街を散策した。なお七月句会は十七日午後二時から病院五階講堂で開催された。▼南海電鉄川柳会七月句会は十九日午後六時半から粉浜親和寮で開催。以上何れも路郎主幹出席▼既報故荒木哲水氏一周忌追悼句会は六月二十七日午前十一時開催につき前日より本社から路郎主幹夫妻出席、阪急電鉄宝塚保養所に宿泊、眺望絶佳の全地で多数柳友と懇談せられた。▼川雑淀川支部句会（大阪市）は八月九日午後六時から東淀川区三津屋北通四ノ二九武部香林居で開催される。兼題「青空」「側近」「役得」の三題▼みをつくし川柳会（大阪市）八月句会は九日午後六時から天王寺中学校で開催▼川雑下関支部では六月十三日、元気な米三翁、滝部から阿岐良老、八幡市から吾郎氏等の出席を得て梅雨句会開催▼堺川柳人グループでは七月三十一日恒例の堺大浜大夜市協賛川柳大会を午後七時から英彰小学校（阪堺線寺地町下車西三丁）で開催、本社から中島生々庵氏出席兼題披講せられる。なお来会者には川柳大会終了後大魚市の指定区域に特別参観も許される。▼川柳阿倍野支部（大阪市）七月句会を十五日午後六時から西光寺に於て開催された。▼川雑倉敷支部（岡山県）六月句会は六月十三日午後六時から水島公民館で開催出席多数盛会であつた由▼津山出雲松江・米子・交歓川柳大会（米子市）皆生温泉で七月三日開催され絲之助、美笑、雄々、明朗氏等が参会盛会だつた由。▼広島川柳会（広島市）七月句会は七月五日午後六時から広島貿易館で開催なお広島川柳会では六月廿日午前十時から広鉄職員会館で岡田俗菩薩還暦祝賀川柳大会を開催盛会であつたとのこと。▼連水真珠洞氏（福岡）は六月上旬から北海道周遊、十和田湖の溪谷観賞後、東京、京都、大阪と、一ヶ月間の旅行を了し七月十日帰郷せられた由。▼梶川蘇堂氏（大阪府）から「貨車操車場と云う気もするが長雨の中に地図でも見てるように線路が丸見えではめしの食上げになりそうで淋しい。これが日本の経済界の姿でしようか」とおたよりがあつた▼三条東洋樹氏（神戸市）は眼の手術の為め大学病院へ入院の由一日も早く御全快を祈る。▼津田千舟氏（貝塚市）からの消息に依ると休温川柳会も先月のステートフェアー大会に梵鐘氏が入選され、又、電報川柳で小田柳叟氏が入選、近時活気づいて、益々新会員獲得に奔走中の由柳界の為めお嬉び申上げる。▼渡辺伊津志氏（尾道市）は七月二十二日尾道海上保安本部第六管区代表として兵庫に来県、神戸の閲兵式を了し後、帰庁せられた。▼鳥井川鳥氏（愛媛県）は永年勤続の官吏生活をされていたが四国財務局を最後に今回退官。近く大阪に復帰永住される由、▼岡山の川柳の自選句集として好評を得ている川柳句集「吉備団子」の本年度版として第六集目下刊行準備中とのこと。▼観田鶴太郎句集が明石市成願寺市住一六〇号石川方視野発行所から発行、孔版、価七〇円▼富岡青柳氏（総社市）の母堂六月十五日逝去せられた。謹悼。▼夷石鼓風氏（東京都）は東京都目黒区柿の木坂二四〇番地に転店。（摩）

募集

課題吟募集

病床（廿句）中島生々庵選
都会（廿句）藤本満年選（八月二十日〆切）
雷（廿句）麻生葭乃選
待合室（廿句）石川侃流選（九月二十日〆切）

毎号募集

近作柳樽（雑詠廿句）麻生路郎選
川柳塔（雑詠）北川春巣選 麻生路郎選
文章（評論・研究・感想其他）（毎月廿日〆切）

投稿規定

▲投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
▲『近作柳樽』は一般作家の雑吟を募る。
▲『課題吟』は何人でも投句が出来る。
▲『川柳塔』への投句は不朽洞会員に限る。

阿波踊り見物は
関西汽船で
阪神・小松島航路毎日2回出帆

大阪発	九、三〇	二一、〇〇	片道
神戸〃	一一、三〇	二三、〇〇	三八〇円

8都に共通
300円
500円
1,000円
2,000円
3,000円
5,000円
10,000円
商品券
大阪・京都
神戸・高知
鳥取・下関
別子・博多
各店に共通
大丸
大阪心斎橋

Printed in Japan

B列5号 毎月一回一日発行
川柳雑誌 第九巻 第八号
定価 四〇円（送料四円）
半ヶ年 二六四円
一ヶ年 五二八円
昭和廿九年七月廿五日印刷
昭和廿九年八月一日発行
大阪市住吉区長居内牙代四五丁目二五番地 麻生幸一郎
大阪市住吉区長居内牙代四五丁目二五番地 川柳雑誌社
振替口座 大阪 七五〇五〇

（載転禁）

昭和廿二年七月一日第三種郵便物認可（毎月一回一日発行）　昭和廿九年七月廿五日印刷納本・昭和廿九年八月一日発行

THE SENRYU ZASSHI

NO・327

Published monthly by Senryu Zasshisha, Osaka, Japan.

海女と真珠

伊勢志摩

浜木綿の花に海女のメガネ光り　紺碧の志摩の海はあなたの詩情をそゝるでしよう

大阪・名古屋から宇治山田へ！
連日指定の近鉄特急　1日6往復
急行　60分ご巡運転

近畿日本鉄道

第三二七號　川柳雑誌　定價四拾圓　送料四円